



063
1-1

葉

隱

仁

№64605

0723

15

4=1.

S 156-4

い始次十一巻返り火中モナ一世上此批刊諸
の邦正推量凡脱ホラ唯自今れ後学小是
古書を出の件ト古本ホモ他省之アモテモ其
事トモテ取引者火中不仕合モササニ

蒲原存



0723
15
4=1



貞永七年三月六日

初高叢倉

古九常

治世了悟里中少山移
古木也身今老了矣

期只舊

一 伊家松モトセ國掌モトモリ今時小学用爲リ
市祖大名は少頃も根えを爲未だ之祖孫宣其善方
は益甚矣と長久するを有す劉忠様に乞門武
雷 利便孫の吉根信雲の隆信様 日本様出體
モ萬感歎の事也久々今世追手が山照今時院
ヶ松後生トテ多ひ能所の佛寺子細中承不二事

海東六事釋迦。孔子。楠木信玄。源氏小龜。達磨。小
室宿主。毛利長吉。高橋元清。高橋元貞。高橋元朝。
甲冑。土下。津井。祖國。土佐。宗清。清持。和泉。大
相撲。中野。山口。佐渡。島根。鳥取。山陰。北陸。近
畿。奈良。京都。滋賀。三重。愛知。岐阜。長野。山梨。
静岡。神奈川。小笠。不當。伊豆。沼津。玉藻。高知。高
峰。土佐。高知。德高。小波。不當。伊豆。沼津。玉藻。高
峰。一車。大坂。今。他方。の。尾。不。能。遠。寺。福。寺。大。根。之。大。
竜。造。の。从。知。諸。清。竹。如。寺。謂。不。竟。造。之。福。寺。九。川。
大。根。之。根。家。之。根。之。根。寺。也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
也。

か、達也、徳也、かの御歎
日暮様、恭監院様、時代、山本店、皆お職と御
上り、御用、三急、お難を下さる用、立たる上り
あひは、つる黒、ゆきうる
日暮様、御事も下
まことに、血、と、何よか、城、か、切抜、か、空、と、ゆきう
り、と、宣、うて、か、浦、か、ぬ、
し、鳴、く、や、と、物、も、う、と、お、娘、う、是、く、か、御、
沙、玉、紀、沙、圓、一、沙、通、新、の、御、宣、新、管、五、沙、往、
門、自、身、流、や、若、尚、に、神、王、に、傳、公、成、 日暮様、承、ゆき、此、事、
大、形、不、可、と、あ、せ、う、と、お、浦、と、何、草、事、か、あ、
も、う、れ、む、と、十、歩、以、恭、平、と、う、と、次、大、ト、危、難、

せうよのちあへば、おもてのくわ
をはなへず、上手に薦めし内閣は、御とてはあともいひ
前してすこぶる、おもてのくわを、老人の承認するが如はば、
ばく聞けとすこひてすこまじめ事もあらず、物語り筆書き
とのよも、お譲り渡さうてそんごとくしてぢりて
きくはすこやかに、一と多めの内閣は、おもてのくわ
に仕立つて、御本は、シテおもてのくわをその元詔傳
リモカナシチヤの軍法の代替り、而柱是も、おもてのくわ
の代を御譲りて、御本は、親王之御本
先考之御本と、思ひおもてのくわをもつて、おもてのくわ
の御本を、おもてのくわを、御本を、おもてのくわを、御本

伊勢此子長丁の太化法作
に於ける事の如き
實に之が苦勞根柢す。事の本原を熱切に心沙汰
する久日が後、事の能く解了する所詳記上也。日本ノ
番盛運種、其苦勞と實に如實而心裏へ云々地圖
沙熱候事多少有る。修復及本以出事多處爲敷上
之也。もつし主事の出苦勞シ如き事、一、墨字以先
で、而後は其事中止と即ち家藏方大形便近年
新復多事有る。其事中止の如き事、時貴小利口者
と云ひ仰鳴らか如事急自慢とて新復せよ。其
歎へ究入出にて、未仕く事一十人之中止
心人のふ熱意化作。他方より越へ事御使御組合

乞備皆以親教垂訓者作、於東解陣以授此傳
獨れ也；而沙包左突厥是極祖焉也。」
是故也而沙包傳解者不皆以代初，又得
之乎？新後主之傳之乎？莫反云「以是繼
沙包而爲大有後初，又以中興既至矣」
則舉孫、泰盛、茂庭而傳之也。猶獨謂上小之下小也。
苟存之以全篇自足，故如解之派，中華之
沙包之敵孫、惠公、範晉安、周子、太常等
門徒之傳解者，抑或之謂也。蓋解之曰：
「二三子也。」
門徒傳解者，加謹也。其不然者，則他事
之傳者也。他方之傳者，皆人罕人。其傳解者，則固

文政五年正月
不以所人而以之爲事也。以渾恩ふりやうすれ
テ御内侍を仰み、仰て御内侍の恩詔又御用にて御内侍の
意承り御内侍門直すにち石井村小林町奉公に
寧人御内侍御用一ノ奉公也。故山川奥の太の
下に生れり世の事と無く御内侍御士城義
鶴源が貴能。 今に松原ふる合ひと金森
有りはあら御内侍生とお説教すまか潤と語り
て下に宣傳。擔持持。此事と云ひ力も若量も云々
一口トヤマト御内侍一人をも行ひゆる。年四十
日人有り誰行あり。よしと申す。大いに喜び

あれは至らまじめ一人で此を勧めや
かくおは所が、まよひまよひ萬羅院の
ああすきそれ、あわせに御まつあて、一通

誓願

一 お武士なれども、乃浦

一 お氣に用でまよ

一 総よりて仕ゆ

一 大慈母に人へあふて願す

い囂れと舟頭の神と船頭と二人のめぐらは
まよひぬまこと大慈母の御よむしえせくす
やえらん伊弉諾御子の誓願を記し終る

同書

一 武士なまご武臣をへまお飯の家ち人情
見こすも其子内、武臣の大そは、仕事の事と
ひそひそけまよ着れ人情之義と猶ほ前著
すもむこすも、武臣ふ心をくすりとす、前著

一 武士道を云ば記ねずとも、うしろ二ツの馬
まよひ、正ね方に行骨生列するものし、向もう
て坐じて坐りあらうが、が記ねども、うしろ
はのすもじゆあたぬてうしのあらまよ

えうよじつめくらむとくとく人生きがりねまく
多ちねまく方又程、ひし石室よせりとせうども
猶豫ひじきを一歩せきと死ふてはだ死ぬ遠
いともあへんと、世のままにあれ無むじゆくと
記、左近記事はゆく者時、おの身を以て一生
底までくも職と仕事へあわせ

一 奉公人一向の工人を大切に御と二そ宮との事
内閣内閣は名奉のひ本中よ生れが先祖也、清
皇國へ歿とし候すと自と擲一向さま葬之
以上、智異山靈廟もしく相馬のウドトニハ代
きと仰り、やがてもとて御法すもとむと御法す

手取をさあはひかねば、とて、おもと靈廟

御内閣下候

五

一 生きはるゝは生まがる人のもとより退ら枕故
まくと、棄出はるゝは生まがるが代極とて、に生ま
ま下はり、せり難い事、押あれあくまると、生まの
命をもわざとせんむと、済く草をれどと、ゆく葉
生れねりたれと根、く葉、四、生れ算比御ら
思本とゆるのとす、愚人のうしれ、うすみ、
云あへるのとす、うすみ、うすみと、うすみ、
押あれと、済く、よどびけたれと、うすみ、うすみ

六

一 お前是令比翁翁計とおのとおのとおのとおのとおのと
天

乃と皆をもよと感すて絶くことある所まにむかひ
弱く瘦き仰るのを感すて絶くことある所まにむかひ
人ト供食する。一人は並と多くをなれ
多所の智多しと了若する。時に叶の一筋
もと根根しくはよみやび絶はちゆの根もすり
ざし一人の智慧は家をうけたものだとし

一 右人のまことに業者と云ひえども古今の智慧は假
まうも之れを立す。もく私的情識と極く古の
食衣とれ人ふ活食もくはか取く恩賞をもく下に
勝がば直義がれ善きをゆ徳とめばゆす。ゆすお
かく誰もかく入て又何事ぞやね人がれりくろを

江上方面飯等は石連まに市に日これくらのゆが
方をや詫むあり。それなせきわしやしゆ僧と
一 相良求馬を伊豆人と一まほ見隠すく詫あらゆる

一人あすやと云へし。一と萬たる處水江の浦を
大金ぬあり。おろゆ候よりは後よりは後と其比大清よもん
後敵下を浦に落の事だもとを供給く供給中の
從者をと集めやつとを企てる人形を立ちひ毎日
舟酒萬石を貯て京阪を満とさせた。大さうもは
い難くもみ満舟アリ。今一體とゆて高柳山を出
事なり。

一 稲丈と山川の字を後押す。金承より

大本昌ア

内一歩と遙一歩を立並不 山居

市

一 諸経り沙家老中ら觸るに至りも在事と
アホの様高取組より 中止組中列元金後
ノ時方限ゆる事一分为道日をかむれども時
沙家所作之而在日をそむけ中ハ家親中
及年海と同合して又之改名舊而舊
算之沿革考親小豆豆之而在物を高取組
往へ勤め後は忠良と名爲ひれを高取組
モ石右衛門一奉書を高取組も御附納会
傳焉云とて後は清文子孫も一奉書を高取組
得筆傳焉也知國に於ける事也

義理

一 大金波井此波波波人川入室中

一
ノ
馬

相良水馬は 痘醫院種馬出現する事無し
拔群の若量ノ毎年本書出紙記又古手せと
の死去年ノ前半本官殿工弦折中すあつて水馬
本物ノ實のすを承かず少林會大藏と共
清思少林教事少林財庫二席如り又其量ノ重輕
純也少林の更上位少林の主行者も兩二席若量皆
お直にて下せや却て來る事との者がねくら甚
程一病者よそ志布りと曰ひゆくこ第山中事

内内内清主事以病ひまつね山中事

五

吾輩はどすは風の奉公人。口五年以内と見えども廻上
筋もへてて此節をかむかもか送ふ只眼とあ吾
それより氣絶するアタリのふちもありま
人今何年中といひすはんとてゆきをみる

脚踏平後名来る寧人より沙門山がお序をあ門の
戸よりは紙を承馬百疋ありふるをひびくはれ室
のみ有り沙門來教人各メ釈り主を取る
寧人所住

一
主君の味もとてて吉敷をすすり事と擲て居
沙門來は花車を之ニ二人あひたソルガ黒むぢ
久支せらとアソブリ首尾無財、智敷もか云は

吉敷可立身のをと出されども主に伊豫州
義敷うりかく是義敷を不文後も、出日の事
立入るの故テスのひとひ出、くとひそひとせ
大刀小刀等意深き人藝のある人までてめぞ
臂屈よされども人ひ落々令と持て腰下腹と脇
くとすとせりか、」
吉敷は立ぬるのをの時、一人高子とすます。
五石ト一合と株を人モ一味因ひて居多シ通云
之時ものあり少佐、不好的志承一人をも詮見
ゆき、あれより日本是と利よりもじとある事
の元、うつ月うづりやモ併治向かひに長の聲

義とまゝあらすじはその本の如きより内省
をもつておる今一語りをあさへる意の心臓耳出立
肺及脾と仕合あらうとお猪の死体をうちて首筋に
おきぬゆゑに心臓毛は龍也、ら七重八重比良翁
入るの所をえふ事多きとくとく棄れ主君入け魂
入るゝとの代あこのお肉の内耳はほひ内肝
とおもてをすくへてつゝの骨肉かしらを幻術
もよひ不當ことお車と鼻のとき半火奉る居候
乃氣理ハすまざ

山海藏人、一生仕官場也。名の休ありと云はれ
まく。有余町人の宅又一生多く云ひて云はる。其の

伊豆云者上古の事と云ふ。此の後
御年中は高野の村井少佐より其の子の清と曰く下りて湖
島の山に退隱せし。其の妻は元は
通称の白雲院也。而して其の氣色は必ず清らかで、其の名を
上名(うわな)と號す。其の子の時より一人娘を産
す。その娘の夫は今不名の以神の少佐也。其の娘が
もと奉仕仕官のものと仰ぐ。而して彼の子もモ

萬物の運命は一人も逃れず、死んでゆく事無し
大名の死云うは誰か一人もまたそなへざりし
もの多く是を能てゆる者すらうらうらうらうら
すまとのよき擲げぞれ、決行すればそれ猶
ぬけ放浪のああはうりともとよほすれど
人ら立本數年猶已経く、一々くじらし毛
坐たる所也御身御心もお爲めに身櫻坐玉門井櫻菊一重
す是世界初也、は人情のよき事也
之若わざとく論討の事、元会利田渡河の事
かくして、すむとおれどとんとんの日高川合櫻合
の一人よき、津波の事

一人の勇氣を一と底致すにとづくはちゆる大意也
奉公の方一もく意見の仕様アリ骨抜かれる事
人念上比若悪とアガル、安満くそれと異見する
事きよナホ大言以人比す、ぬ云ふべき事アリ云、
汝即病アリヨリヒ、それを仕様はカヨ、宿すと
之を仰へ、意あらシ人下物とかセ思ひテモトロ
モレ、而猶もソニ云とニ之見とシ、有モテテ
人の道、道内凡れ氣が極度に入り魂子の如
相と共く、後仰立候事仕様アリ、の通り
ノリ、以テ御神社ニテ、御事考成、通
或モ嘸乞トモれモ、御身の上れ思ふと申

不吉とぞと思ひあらね、まり能所と禪義三乳
と川主すまの神が、ごくまことにおれよとお會せ承
表の字見之はの手仕事も、どこの車の車
をあれ大利と日本下にありても、そとて法縫室を
氣入魂としゆと正し一味因縁の冒頭と云ふ
それは沙汰と大慈悲ことなる聖とあつて行
く事とぞ

一
仍矣、立身するに至る、宰人の耳に上りて上を恨む
仰仰、卒人内裏と非と知る、死ぬ事無く
而方修業の二度めよげ古蘭詞より、言わば
生を能むる、利弊をよ山路の聞き方とすと云ふ

因縁とぞ寧へ、手のあら、形狀を察うて厚集
きうちをか今、小じ情けあるの、従の事ひの種と
計り、猶と集し、ゆきだれへ、更に此處と往々
仰あれ、併列よ御界も、御界をもうと、人のが
云ふ罷一人すわうと思ふ、尼寺尼寺と、序を詠
すとやう也

一
江色平風と春晴、中野松島岸、うち雲霞共
をよしよ一つの、外少とおなじ、おもと浦事ゆくが、清
いもとと、うねる、御ゆゆゆ、御ゆゆゆ、御ゆゆゆ、御
ゆゆゆと、度能と、御ゆゆゆ、御ゆゆゆ、御ゆゆゆ、御
ゆゆゆと、御ゆゆゆのゆと、御ゆゆゆ、御ゆゆゆ、御

此時區々のと葉一叶無むる(背後すら身も心も動
ひの方よ氣の附きありて身も心と能思ひ立てぬ
ノリ和の道之徳儀之亦貴人なしと呼うとさ
若者よりいへば庭つき山木ぬ事の如くかゆ
ク於て山木而にくむ風をかゝる者いへどりあら
む者用牛の外はぬき以新(アヘウ)よ
折枝よりはさとも能寛折りし見り折よせぬは
寛えにはしないにをもたれ故とあつたりあく
そそくやうな大半の酒からぬりすまつて立た
ぐふぐのありきも勢いすまふ歸れよと云
又たゞ此中すら池を駆てさんあく紅色に

もくとまきとす
中野監上等も又連座を以て至る
人中より其の事に當るゝもの少く、前久生所
親しみとぞ、あけむかせびりそん、古とて唐絵
絵づりと絵引、又は禮と明神とぞとぞとぞ
あらゆる類の様子にて、之に付けて之の内
幸れどく、其事とおなじにて、
翌日も行方吹きうそれ、是日は其事とぞ
往る人多く見ゆれ、食事の後、行ひ、直ち
その間、其處は密接に、而して之を防ぐ方略

その事例を二段落もとほりと
かの如きが珍れ

一 舗教の御上使 武士道としと後れに
山手と武官と天下の公卿の事と貴様をす
等は是より居候可立身のことをよき徳性事と
説ふ。もとて御上使奉はたま
は御一人の御上使へきりとあゆらんとつま
らしのよは成へりもの也。

一 御教の御上使食経内侍の御上使琴の御縁
をも行ふお殿なきはあくまでとて御上使には

琴の御上使とあらうやうておもひ是のをも
ありとて御上使と御上使には古道足りなくても
お車足物と相とて通えむ事月以降と申すと
心す。あまでも氣味の能人、歌もよし(も)やく
されうるも御新作を家威勢立せりと大す
け事とのよとめことうち人よ對ひそむかく爲る
まくぬる。道とおどりのものは紙とぬる様と方
とあらゆる事もよき御上使それ、道とおどりの
仕事と人の御上使成れども、御上使はもと仕事
仕事のうちの御上使とおどりの事とは書かず。也と
あれば貴人は歌をかくの余り歌くまじめ

跡す乃ひ入るゝ也

一

一 竜の士不見代士をつゆ軍事は沙汰を竟志
士もとは車よりはと仕度ありしもいに此一竜
とされり 乃は私どもは味はれども所よお今は御
とおせどもあらすれどもおは極をうえにまへ是の
士もつてはと前もくは縛り合てもおきほゆ
は爲め前もせんざくせぬはふ見代士とや
一 日暮様はおもて内を活躍人を露見石幕がまくをも
仰そ有様のすりつけのておほほりとくを以
ふお絹はるいことお後れくともけあひて年
寧人との切替の跡すとは行持よめの活躍人をり
以てすてもすや

お立を指す者 お立の圓字をかねてお見をわすれ
お立

一

一 酒盛と相手はいふてお手てと目と口ふた方各
ぞうりと酒をいふねはおとおもひ度がとと酒石
あをぬび身紙はおとくにゆく大方人のいへ
ぬけくも足ゆりもくらめとの

一

一 行うと萬物候物と細字は中から來ふる水と
活をれ、東ふ住むりゆりもうもどりのゆる
おとと法よかくきくが長ちるくがくはんれり
ゆのうとれんとおよりにはおれよくとくお持す

以てすてもすや

一 諸役所より御事所方の事訴訟とて訴を申す時
又お方處をゆるときや食事もゆうと食食先
諸官吏の前より舟船より是より舟船を
さうは又お食事より舟船より是より舟船を
しよをゆくをすらといために定めに人
ありの事は必ず事より舟船より舟船を
角がとせん者有り必ず今も汝とくまは無れ
合が士代法は直に能めりきよ堅きは方
士代法はゆづれ

一 仰坐居浦とて、夜も不を有て、暮れ也すれば
ともお宿ゆふ事は、御事、夜も不を有て石船

と云ふ事は、其行を便よりひそしに傳ひ上り紙す林
屋の處人ありぬて、身ゆけ仕方なり也る人をたまき
れと身く居て、居て様うなきゆそと身ふとぞ此山
車り遙く彼を人ありた一云もしこせぬをとて、身は
あ波内寺へこれほ損徳のとて大根がき、財財す
なりそれと應へり、如何と云なとやかく禮節
と云ふ之をあり、良などれを却て願也、以て、文
て願之想の事ゆ、ゆく云認もとくあず、皆損徳の事
ゆき換えを、事は相手は物をもとへ、あれど、事思
むけよをもゆく、智がうて、近處之は。

一 石井又魚は大急量もあつて、筋乳牛を解出で至

伊作仕組金像内に系歎より又寫(伊)奇書(とみ)江
お駒山又駒山は筋引以来今も生きて是もかく御定
居是敵様の人云々を仕修すと有て古い物の
見るやういきよゆ

一 行あるて浦井大内山を即ち當日付の筆を以て
門を重ね入るやうに方をせしやうが駒せき上
御意代承り御紙とあはをく切て仕を力と候
よひ自らと完き門内は御事一より年古消半
いふ之御其紙と生と紙一石いよ一石の紙とせ破り
りて写かく書下若駒はそれあやめはやく御士
あくまぬ一往そ沈あり也深重

一 海音鶴塔前古葉紙の後より小者尤小僧達落葉
之づよりれく御市れば候ふくきと嘗て駒感心指
しもへ行ゆもあ此駒をゆ

一 每朝ねみは信光の主君 親あれより氏神守ひと
はりや主事大切に信光親も信光公神と仰て之と改
へ方は思残思より外乃うやうへ志慕り信光あ
御身多氣り行所も離れてかず亦女はす一下丈と
主君代たゞくと改ゆ

一 仕作方既に修理時宣は二字ダゲダテトと改せり
もうちずあれ、时宣は不見と改む

毎年夏迄浮立下の難地に度次うるをもと入る

支那は主に中国と當が絶強満の三十之類す而江蘇
江寧より通じて最も前より不思議の支那にて
おほに通じて換ふを指と云れよまこと及営業下ある場合
お食死人もお身又是の人も喰味か木の頭りしら毛毛
ト代え今後のみ立合訴食後生食すを在見の常古
思ひも瑞氣が木の板の御事場の如きは亦表え
が事例より玄教の堂を考へて以年以内未だ
役志幹條高數人斬罪す并々津浪を死亡年一海
色よ金立氏下宣立し亦 啓中白原十萬石を某立

ナムトアタメヤモリ取

一
納福は近代か否か観たるより豊那とされ大寺
法源よりより済日と云ひからぬ筋年と大ち成れり能効
也と云ひあとは仕候てあくまかうむと語り名を
お膳門の名代を詔書沈一の義理大せんきゆと申す
もとと申すよりは御は御しとて大氣り化山先達
是と云ふ不なりあるなり今比和為成て是非か否
かと大氣り法源よりげき境地足りる 築又入納立
事と云ふ備前経せども構は設てよばは多き是
は約材を富多く其事後後段ゆく能なりゆうと只
ひすりおひの長老小兒解ふともと利り哉

此の方法の如ナリ。或は教訓一通にて、却て此の如きの事例
が最も被毛色能而多く也。亦病氣取扱之類也。

一
今内奉公とらうよ。いや御い眼代自面スリノ間を
この大方身乃為に歎神の利教身とく亦小魂志
病氣と云ふ事は身換と申す。之家身と申名す
造ヌ死切之而天成と云。内中主君の出来と歎き
半世経之急上アハ、身と申しも少く不眼哉
自稱は身公人とはされぬこと下れ高ちてちれしげ多
トギテ也居もアシム神社効とく、少も未解
是也と仰はゆる
式のゆえ
一
松風の亭宿は年々山野の勝地と陰陽ノ事

席詠の音が互半い胸を替り乍ら化すやうに木界
娘の女体娘も因物は成り氣り行ひゆる眼鏡
席詠男の眼も女と席詠よと相魚と見えよ 男に
男の席詠としてアヤシムを詠むといだをせりあま成
男比氣裏へ女因あく入りゆきほれ是ハ惜え仕度ゆ
事と秘事と仕事と門道是と行ひて今時の男と
尼立よ、いふあり女体娘もとぞへ思つくり多あれば
男とと見ゆれかとれ それ有り今時り一力こゝ
此とあく上よお若と相又男比男氣ぬとす後後
身は絶り首からさり身もめどくぬく拂り取れ
たまくとは即の名縁と利口の魂の入る者を

子時代より少く、後年まで云ひあつては

男役と見え、底勞役の人中、生れぬやう
り負担りくものき、若男は、血と汗をす
されとたどけの様云ひ、のまむとよもゆと
すましりも骨くわざめいもくと通りに着き
るの如き役事

中元

一六七〇と年云ひ、あり、四十も後出家思は
經き生世もとそれまほき難むすむと、りそめり
を時々死考ス、改宗して出家するが、今思
まく、勤角は、もと、いふ若考、は吉の安乐
考の中、お召の仕合丈又あると、心と思へく

中元

該人比内侍、食家心を能く顧み能むじけ、況り
事の該人比内侍、御も、一きものと改ま
一筋、系主命知合供は、あり、能、能丈今後、更改
を新古酒角け、多角く、古酒と切下と改丈か
夢酒と、古酒曲とも、多角のあうり、より
二度、換え、更に、もと、人を法い、乃、酒
味、味と、想の痛じ、いは、人を云をきる時、一も
あと、而ち、方を改め、改め、改め、人の方と、もと、
さう改めり、と、前方より、あらわす、人の上と、もと、
なり、生かむ、と見せ、方は、虚方下地、和方
な、人、始く、と、もと、見せ、かうして、いはれ、日也

四〇
一

所教より仰はう大事にて少くすらゆ
渾沌初萬物初生アラシ念を乞ひ行教りテ前々度志
せぬ之を念する事は心にすゝと教説の而ゆきす
もハ宣教令も一聲吸れ中、教と食あらヒトモ渾
則後之を教給の他も道は一ツにけえりと是凡て爲
よもか紀考之純一ニガリハ切と積まへる

是
一
いはとくに、うるを云下乃々御政之れの方
をきゆを
今ハ失ひ
を失ひ
がのあら
うりとあら
今時の利れと
少は多思を仰
いさゆかとあら
更に死すとばかり

なり紙をもはせり。在此の内さんと物ぞ見えは原
所のまゝに能能役へて充役又色どれかぬやう
少説と持度之

の事と老をかへ思ひて之方へ移りて其へ入る
に後是け方數々の中も人代はふが半計と葉し移り
事云好き三それ一處に用ひはひきの所方老をかへ思ひ
すれど奉云老をかへらむを老をはあらむと老へは
他出をめりとくようと
力下ニヨシト割し、天皇そハ御所比メヒムサク
ノアハ

幼は一子下訓也、先生也。御所比と幻生所比云
世尊は皆かくりん紙幻乃字と用ひ之
一
一
一

古事記と
後醍醐天皇
上醍醐西院
四天王寺
有の人生
御所西院
御所人院
御所院
御所院
御所院
御所院
御所院
御所院

すり仰ぐは成程す（を）さきうどりよどびす
を身氣味はよしとて云ふとあく抜切らひをもせ
ひり十種うち管ぬめのとをも立ぬす（立むす）
曲をす（立むす）足は次のかすり邊（そん）中出（ちゆつしゆ）す
也モ詮教（かうけい）にれら教育（きょういく）もかほ進（すす）み取（と）り去（はず）る
身着（みぎ）在（あ）るを身氣（みき）氣（き）と成（な）人は身（み）も身（み）も身（み）も身（み）
身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）
身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）
身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）
身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）
身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）も身（み）

居（ゐ）とあこせ（あこせ）人（ひと）内（うち）渡（わた）ひよる時（とき）内（うち）を（を）及（およ）び分（ぶん）局（きょく）
方（ほう）と入（い）れ（い）るもれは多（た）く（多く）よ（よ）く（よく）歌（うた）を（を）曲（うま）
う（う）れ（れ）い（い）ほ（ほ）く（く）る（る）歌（うた）を（を）持（も）つ（もつ）て不（ふ）調（しらべ）
や（や）か（か）き（き）を（を）並（なら）べ（べ）て歌（うた）を（を）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）
人（ひと）教（おし）あ（あ）く（く）や（や）か（か）き（き）を（を）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）
を（を）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）
一（いっ）不（ふ）義（ぎ）と煙（えん）と（と）も（とも）を（を）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）
光（ひかり）の（の）向（むか）ひ（ひ）と（と）も（とも）を（を）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）
上（じょう）道（みち）は（は）あ（あ）だ（だ）れ（れ）と（と）見（み）申（し）た（た）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）歌（うた）

所より此へ是れ人所縫合也雖道より以て人をも取
り人には見えゆきとて是れ又娘曰八日と云ふ事とし色
非紅色也と云ひは誤会と極むゆきとアラビカ書體と見え
るうちと極く古人にちがひ有也

改編者曰先づは一に比弓の物ヨリ次第アリト
トの仕は候事無物ナリトメシテ之を
トモと見之候トアル事ナニ中の仕はアルモニ
トシテ是日スモトノ人の事モルニウムとの仕家
トシテは後く自慢事の卷を取ひ入れ奉と取
り是ハ可立ト仕は御め奉リシト居ラシム
上モトシム大方是ヒケドニ一所立紙にて繕まつる

位を乞ひて深く人情に染み難むと見りて是より
足らずかはれどもか是を事とすと云ふ如く一生成程の家
世の自慢の念なり。翠竹代り也。もく黒は柳生後
志人玉猪口。志士の象徳也。志士の如也。是が是
志士は上手。成程今日よりは止むが如て一生目には止ま
ず。是も果はなき也。あすすりて

重音云に筆書よ大筆の呂葉は極くもべりて一擧の
往けはお車代呂葉は宣を十也あたひとすは一二ヶ條
ゆゑそばらが當てねは半生食俗をくえきばかく唐
勝りあれと和風ス呂葉一筆て大筆し時ちどく忙
すと思つて焉ては石炭收手へとモ場よりて收く
もか

あらすり難が當りあらずを思ひ急に船を乗
毛りたるの見事は極まつて餘裕の際も
足りず

四六

一家龍首湯駕更化後一昇をも文仲昌而後の内
年中はかくよと初うきを経て半は化をなすと年
人には若くとも年は一昇をもは重質の外と通はん居て
年中は湯駕のあかう比石はゆきの東へ移り居て
西へりとし物を従ふまどうとこも子細の皆比重
質の云ひと出ぬえ見えども子細の皆比重
家よりあれとあざむけとて年人は出でねえ成り
是れよ説きて通じておほいもふ人家相と教申す

辛く非を教へ生ふお節と古風と古風と也聖代字とヒジリと
刻は北と教へ生ふ伝へ知非役の文字とひくおれと廣
物ももと後詔とひくと傳くとて一日の君更んに書
事政限りますと敵は能むと思ふとひくおれと書
自ら一罪得除ゆと傳た武の尊が御と大を傳えられ
口をせぬれ勇士と思ひて武勇と成れり故成武勇と
欣れ氣と佐めと

四七

一 武士也者かよや我れ武士はせすれ武の尊と名付をひくと
出でて後は我れ誤てかより字。一字かくえりや亦を由
吉と傳ふとく我れゆくゆくゆくゆくは生くとくとくと
吉田は曲志もれたじれよアタリのふと生くと生くと生くと

四八

四九

少保武士の武と城主とすよと並び追々食ひま
まいかとも思ふべからぬよりたまうりと思ふ
まくは取れり

五〇

一
内事大臣政の勅任下達後もあら上方にておど
りの有る法典をもあがめそて又日はアトスヘ
後院に奉りも伊國といたりするまゐの川と
朝あさき内は猶う事事方と申す田会風せえむ
他方より隣の山(きのやま)の時をそひとうや
ト所向と謀めぐらつてとくも伊國は田会風せ
るるり御まき立そふとえ風を生むてせんわまく
或人を岳(法華)宗はたまがことせんわそふ立そゆ

五〇

一
喜岳(法華)宗はたまがことせんわ法花宗もくもく代と子前
まれの御家とをりゆとおまゆをこまひ
一
何事立身の金條の時は和太酒はりて立身共用通
音做(度)付内事(事)は一度深きとらものとの後
參(さん)て今人か東ヤ乃方(のうがた)へ一度深中(しゆちゆう)をも深と
て以後(いじゆう)悔(くや)うやうる伊國まきひ立身共用通
音やか内事(事)は多方面(たがた)に廣(ひろ)く立身共用通
音立身共用通音を時(とき)にとるのとくに(とくに)立身共用通
音立身共用通音を時(とき)にとるのとくに(とくに)立身共用通
音立身共用通音を時(とき)にとるのとくに(とくに)立身共用通

五九

一
中野松馬(ゆきま)公(ひやう)が矢張(やばう)ておもへ御(ご)所(しょ)先(さき)門(もん)くや出

一代ゆりに被る者思ふを以て救人の如度は妙焉

一人あらずと口と扱ひ古人を以ては時事大に及ばず是

一般様のほんと然仕事し其は漢也は仕人、太古者也思ふ
御恩の如きよひ御心御手御子御先祖様心入林も御心御意
此と在仕度せよ御守り大半、了りや

一 老人の力、爲なはは今世に力は無能勿論も人を仰ぎ御心
人は抜きとさへせやひそれと相違ひなくゆきり翁も
すく様が、と見ゆく者すれどおぞく、
正義公

摺合公もととしは江戸也を代より是れは元老院也
すこは上は利方將とおぞく之接が、とひる事され
たまひ況に先輩へ賄候云々の事も所見絶好也

一 之卷云、後後漢五府制、前高祖上高廟、而夫成之

御見人多し第もか、後成漢式高祖也又之盤江
之成之傳也と云と、行内御姓也、其歴様は
後漢也、斯也と云と、御接也、有しやく

一 何事官事ナリトセ歴也が如くすかと仕様也
至く切殺さうとこすを、歴又成之は深く厚く思
方々が余向き大勢也、してけと移るを薄く
ちうお法も極く相手行もあき、行徳もてゆと思ひ
室て立てども、とて、爲也、多分仕事いざれえ又成之
良、(後)付せうおもて、彼却ぬが城也、又主と付せく
歎と付せん、之もあを良也、而云也、猶志す事く

上文元の多有り これに従事するに仕事は長流
宿泊地をすら見てゐるゝをもてて承認せ
ば外の近川幕故入れば甚威儀とせしも不図の事
ニテト挂けんとてかくアケルの批判せぬ事こそうそ也
武内氏以降では下へてお方又以降と云ひハリ南
かあや年令あるれども承認せしむる所の如と云ふと
意の如きの事なるべし（乾也或てハテの事）小説の如く
思はゞメテ降と云ふとまじめの如の如の如と云ふて考
負はん（船と云ふの仕事は死ぬとも死ぬ場又ふに叶
カナトシテは船と云ふの仕事は死ぬとも死ぬ場又ふに叶
ふ考之二事と死ぬとも死ぬ場又ふに叶

一 奉公又底の才アラモウモ貴文成ルタリニ一過通ヨシ
あれハ底は亦アリム行幸は利口老ヘタカク人乃仕事比修ハ
因リテトモ生財ノレハシテモシテノルシテノルニ世方非ム
サセ初ヌルノ入社は多シ前ナラ忠浦トシ人ラ活潑
トシテ人ラ活潑ナラシテ勿様の能シテナラ美シテ風景
一ツナ底生テソシテノトト

仕事は心情より何よりも手抜きの仕事ではござり
それには、仕事の仕事は仕事の仕事で、心の仕事
はうまい訳許さぬ。少しあつてう侍なれど、お見合
ひく、無事の事、それとねえねえのが、てめえと
説が付るのを、今日まで賤めや。

居宅衣冠洗身身出處又は御食事の事

無成れ候事其事より承わらずと云

五九

一

行幸之子近はあれよ之様も頗る病て元経ニ
シテお擅江君と曰ひかく此子近と二後経成と
子孫子とおもじりとす母に生むるを甚る病
を承詔や也思ひ故に重身御内侍よしと是故
れや是病と虎子の爲ふる力法令等の頃と
きて群病ゆく病と大々せしと母ふ爲めも病の件
系出やくに知る所又生れかと生れ大幸とあひゆと
沙國兵士ゆきの生れかと生れ百疊町人として
知りて實父れ生れと云ひて詮方すうすま子生れ

他家大本と連ひ舊臣一ノトウタチヤハうござんけの後
と云ひ一萬石家（メラミナカ）忠親大本に下ぬ、
今忠孝又肯うちとは（モルトモ）忠親大本に下ぬ
久今もあれた者は口親の心よと云ひて松と教
乃れのからむととのけつとあると親の事もあらず松と教
仰仰れ而て、と外每わ親にまよと松と仰
渡と済、民神（ヒトシ）もせねるもあらず松と教
名之曰一念立地の事、國をあらざんと仰ぐと云ひ
よまた教へし事と云ひ、天也、國をあらざんと教
はくは事と云ひ、天也、國をあらざんと教

五五

五四

五ノもゆきや秋や月は實因よりすらせんと失ひ
能くうと立候候ゆるは被ふ不直傳れ及班人號
及白所へまかに至りて右者を立て未直傳よ奉
あしらと行くナリテは天地と思ひやうじの二
江源在多經は敵さうぶ少神又通じうかと有
一世事極難がくなん已成ヤニ精と生と人解をあれ、よほ
ちくおうかよ逐人を精と生と生種子は性と極く
伝能越よろ極と物ものとぞうのハ一生ゆうすいよ
是これうちかまを仕付のは身みとよめとぞうを
背せきと思ひくわうと身みは空よ叶かなヒト一生拵付
ハとちくすゑの形かたちりては手ての身みとぞ

一 岳本方神事記詞板碑文

一 元又口是は方神也

一 本多矢口是は用はせられ古庵いわを

一 本多はお詫わびせてもあと前まへ食肉じきにくをす
厚こだ経は初はじよそ海うみへくも見みゆは

一 拝まつ下さととくの音おとの音おとの

一 去わる紙かみと最さい終しゆお枝えだを年とし出だわ乃のは
美うつく其そのは力ちから野の一いつ櫻木橋さくらぎばし武たけ山さん御ご殿どんと
細行ほそな馬ばおぬ侍しらべ乃のれ

一 納なは七しち月つき紀き日ひ御ご水みず月つき代しろ食くは生なま活はづく
伊いいとく

一 士は喰糸を、定楊牧内にかの皮外、虎の皮
一 曲たけお母さん。

一 今子で你要るんを候りとくやういひゆまで取高御
行多々名(さ)やもの中てんりや只よし金玉考
やうより仕事ぬけてギリゆるん清、而は正氣
もあらぬと心ぬけと御にゆき抱一出生あるが、此の君
よ、思致よは若武は勇者と外しあるアセサ筋
まへんれどアソリラシカド。アソリラシカド
亦は雅歌の聲高金玉外はづくと

一 落葉散御世子霜のくらす 先帝手代まほ御傳
母衣一言す御亂事大失禮至急手よ窮室と

落葉散御世子霜のくらす 楠葉裏御市と先帝御立室
御承御事鉢中仰松高(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)

落葉散御世子霜のくらす 楠葉裏御市と先帝御立室
御承御事鉢中仰松高(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)
木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)木(よそ)

市へ先づての余波は第彼にわれの日が但田に暮
たる爲も良からぬと感じて仕合と申すと申すと申す
者、多也かと申すれども、おもつて思ひ入る事骨筋骨
筋より、半幅丈の袖中におひつまち抜まざるを時
枝馬やく成程むとて今りけふを申す内やうなアキラ
トヤウを東かとて一之國をや承もと班兵馬をもて
ゆる枝馬を據す下に記すやうは人の命ば
死ぬよとれ候今朝已ニ申と枝と対を申すやう
枝馬子の申す事源吉義政は多が枝馬氣候
又以降是之

六四
一

五十年のあとの七日毎御代金と云ふ

是れとやうて怪石をさうめまえみつた。往復の方
えときも武道一通は遠とふ行こうと城より北へそ
て多き物えと引き落すの風流の様は風流の姿にて
ましゆ今も死と必死れと懐を極よと差疎くば
キ死ぬを免かし、實に懐と筋に敵、又死かせられ
る事あれば老あせよおえと考へしきて、ゆる六
浦隊はいへり、船で、武士たははく船のみにて、
男浦の隊はすこし遅て、佐治の江邊に船を泊りて、
死よるがやと春子勅使舟はり、御厚を召す
ケ様のみと見えしむが御詫儀、御傳手にてと送り
あとは船を出されし船とと寫真をほりを行ふ様

とて放せり。伊佐乃村の事は、
よておもひ死れども、おもひ死ぬ場所は、う
橋にあらず。必死又むづづく、賤き振るふるば
は多し。能工丈ではす。三十日以降、母凡我考究、
着す。おもむきの間、娘の嫁は、考内浅支の坐衣裳
吟味。少郎の姫嫁も、けひよ先を一月をまねやう
おや。是れ、凡候ばかり。考内坐す。三十日をま
し中、戦せし。持す。すな前す。坐す。ひ傳の志と
ふ。坐す。ゆき懐氣。旅はまく。是は世上花簾。か
の達者也。とおもひ。服を脱ぎて、方へて承取ふ。公
弱り。ふはらむ。元と角む。お決意のえふ。ます。居すもの

おまじねと能を持て。參らはめず。きづこそ。娘
乃人有とも。はまく。義理も。はす。おも
一日。新郎は娘の事と從そ。轎と。おもひ。想ふ。大神
の神事。おまか。春。一个。娘。おと。と。おまが
おおう。おおう。娘。前。正。娘。一面。おま。おま
おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。
おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。
おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。
おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。
おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。

六津義成の手足を以て多う時五は先立
六律義と似る事へ能くも以てけりらむ解矣
師直とする事ト

大子の仕事はおれが行ふ所を多う時五は先立
門を離れたる所まで出でおれまこと

奉三八六のやれぬへに、門主の門が二層
重ちのねまちわ体臭のちうつとかてハモラ真
さうかとアヘウニ止め仕方へゆき

一
一族氣あくべりゆのし方、落ちのひは能時前ま
まうあこに成るを思ひキニ家と同手けりより
あうのひまかよそく事、能う事、とくとくとく

舊物あり又初九は滿破く然すも有難わらず
與之立柱にてかて能のう者ニシテ威阿リ別て一
大の之を崩氣とぬやに泊とぞりむ事

一大酒を海れとおれノ數多くあて酒をより生れ
角子ふと能事と上は吾は松方を二事とめよ
醉也はお酒法でハ飲やればはよかふ事すも耳
をくじらぬ余は了當て有事ニ又因義は更とよ

てゆる

一
六依六下身れお際よれとせらわハはす比算比
都うとそては近えりとどもよまことノおヌ氣を

てゆる

一 我處は食事てキヌホシト威士ヒミト曰クハ角
骨成れと漸氣老ムアリトハ筋骨ニ廢能い事無
ク又仕事トノ海事ニ難カ多能ナシハ下劣ヌ

財事アレ大至ラムシテ

一 云々ナリ後日トハ母モモトハヤリト南寧ト被スアリ
アリ能達の所持トカズ前カの之怪ク行取ニ又は松

ト行け表田んニ麻子耳の色情ハシタニセキハモ作
而アリテマシテ松ノ信使ナリトお調合テ
お調合ナリト松ノ信使ナリトお調合テ
モ遠子あれと成ル成ト元作トガリモリト合調
フ事ナリ而ナメハ流れた事ナリモアレトヨモモモモ

すハシモト道ハ初ヌアリト多キ仕損有ア

一 壬文は能シタル多キ失業事業之行取和尙十戒
一通ニ一也なあとアリトアリハ非と云經めニ此れは
玄經用ヨリ三教足極スハ國ウラヒノ大方ノ解ア
ナリ理歟ヌ又國ノ

一 今既ニ身をわざアリテ一云う大子ハ如意の
御中立矣シテ之ノ元角也事ハアリテ莫外れハ
病ヘキナスミトカヌ事ト浮事等アリテ爾ニ
エチニトノリナムアリシ也
後醍醐天皇即位四月退院付赤松楠少室上
御感の物控ツア事ハ只手アリニ威儀清上

あり後悔せぬぞとすこし

七

一 仁宗貳高祖歎き五色綿毛と號す者多
西川を下すと北山の子の何事ては江に水をも
化してて傷寒を治め疾よけどやあが面に血
一 去年大東役の時北山にて采薪多怪を行ふ
理す空やと又は主に向まつて山をよひかく
の音がれどかくて力をもとと
一 俊所をもとめてたびに空はよんは何角田をと
角田の時多手ふとんと浦ら寂びとどもあふる事
左様の精神もつて能林より下はゆ侍の作法へかき
かく申へるはゆるの生氣也

七

一 みよぐ人不思議のひもと貴のあそび
んよめしやうがむ十行乞は因のひもと思は
有段二

八

一 大風威を嘗て事務事務中て儀を起と歸
乃と乞ひ入り御下さと通りとく傳そひのち
初よ興ひ立りと傳ひとくとこ若即傳す前
先よ御を又てよしと

九

一 美威威威と武を奉るるよしよかま(重じし)
立く純く多く塵埃を拂ひて坐すゆ御中を
唐主の号ひのれ(あく衣被をわすれの様林半
とせられあら本をいはせに神威身もあら内

十

密亦は既に死すが（豈れども）もとより内に衰え
と云ふ事を爲てましむるところ

一 景天ノへうま本邦ノ一丸也まと平生ニシテ一派の

奥伐カシガ浦お宿ナシ今又ヤ立キシマサニキモ
テれどもたゞし毎日行方とヨリ前一筋前おものみ若
あゝ景天ノ連歌師ナシ候も房序北前りう
いと静ひ奇古と云ふ其號ナシ一事ニ時ニ而ヒ
お藏三昧ニ有

一 中高ノおれ山極シ先き爲て平生エトマツシテ
心身そぞく事に成ル浦口坊南（北）モナラムシカホと
用ハサウエヨ威氣アラモ右ジ又付サスケウクの

か存する。軍隊では武切のノアキシテ、余は心を
注釈とす事多坐至極、嘗めりには、傍くまかせ
武勇と於て、手を取ぬ者也。平生よりは、後
洪山を過ぎては、は相模に通じ、一旦下る城とも後
得て、此れ迄みどろ在事と年有萬葉には、一旦下る
城く長府居酒セキシテ、今有萬葉ノ城ノ始ニ爲め
終乃猪ノヒナシ

一 武切子だけに育ム松葉のノアリ幼少の所、勇氣
と並ぶ才能初生したてたまひゆうと有万葉初
叶えても、後病氣有は一病夜へ親しむ事まで
雪落したと、氣を行くが、アカトヨハシ重ねて成

活やまし角等とくどきを説かる事や沙はる是
ノ事ニ又知らず沙はるは入氣成ニ亦已矣。曲達
の核也トハ云々と云ふ事也。お前也わき難事様
を説く事、氣を付かぬ事也。お前也もお前也
モテ大哉也。生きる事は死國ナ女ま中也。お前也
ハ孝ひよドナをくすえ多歎ナ(モ)高きよ卫訓
沙はるみ物もとあるがゆゑ母親更ナト父子中也。浦
安ナ母親は行乞トヒタルく子とモ也。父親是也。先
子れ恩負と一子と一味どもれもまづふむ底
うり女共也。さい事は沙はれく子と一車也。沙
アノ(也)

一
立室立庭摩ナハ人よ將きうみ方ナリ本年方業の第
氣ぬけと居候がよ。本業候事成也。とく代ヤニ坐室
あらゆるが坐候。とそれゆきにさる。は秋也。ま
さとし。ゆき。秋也。アマハ。同也。の。人。私。思。お。ん
鶴人。よ坐て。行脚。裏。れ。ぬ。き。め。や。と。二。方。の。立
四。又。は。之。の。事。を。沙。レ。鳥。の。情。を。う。キ。ア。少
男。人。家。狗。又。金。の。ね。る。か。ト。は。毛。脚。ア。ト。見。ひ。ま。の
産。福。を。す。ト。見。ヒ。ト。沙。ナ。ト。先。立。ア。モ。ナ。チ。テ。お
て。シ。ガ。内。ス。ト。達。却。が。モ。や。ア。ト。と。サ。ミ。モ。お
ウ。少。年。少。人。行。到。事。ぬ。ア。何。ア。ト。沙。ナ。ル
川。入。る。沙。ア。シ。ム。の。事。成。事。行。到。事。沙。ナ。ル

手之

六

一 ほまの故に始初を永く一歳、復次て已に併す
とおもては用す我事は詫矣。前方より被ひ乍ら
此事は未か第に仕事ける所、其外は皆となむれど
仕事の氣性、中止せば以て亦無振るて是間
仕事の度は、終年竟用す。おちたるは其の
力なり是れり所より第一に其事はとへ隠し流
れよ。第それ勤めたり角は奉行に付て候ふと
承事の腰にて、の寝坐する所立侍と云候ふ
也。底に、料りとすと却後仕事の第一勇く進む
義理薄代り承事まで、至而開拓と申はれども

は所に於て盡る事二

備えの通別事二

一 痘等の事あると云はれたり。まほ國の工事
あるとてに之何事と一瘡者よりの工事と云ふと
傳焉。傳二事とは教やう心を雇ひゆくがてと云
候あらは侍の實上成ゆと深く考へて之を傳焉と
用ひて一因つて事二

一 風評と傳り、考へて之を立す。まほ國の工事
之事、一役人達と缺てばれぬが、其上は甚しき
宿許を云ふと申した事、まほ國の工事は
主政と考へて之を立す。考へて之を傳焉と

七五

九

七五

七五

亦、此れの如様て云ふ事思ふ。山房で承西
 一 云て改ひよ様事されど、いかに移旅於降は
 謂思滅し、之は謹とおひて、其程にて、是る方
 あらう様をとて出で、向う時多めよ、す處と、
 案白か、かげん處也、是又智者、今は謹て
 や、此處を備と、極まらず、すが、力は、かく有
 」て、ヤク、言葉、因、あく、謹上て、ゆゑ、ほら、や
 ハシ、之、空體、一、佐古、海事、ノ、の、川、坐、三、ク、
 又、一、往、と、続、か、て、一、そ、い、よ、理、さ、ゆ、人
 一、主、病、行、傳、ヒ、久、津、多、さ、く、よ、う、う、年、あ、れ、を
 ま、か、て、す、壁、く、此、數、あ、る、や、て、上、接、と、見、る、

ア、か、而、を、至、了、傳、ま、を、限、を、軍、

一、今、素、ア、レ、宣、人、な、と、手、て、難、済、す、も、多、と、上、れ、る、(要)
 予、數、度、は、は、く、と、と、く、き、多、か、と、之、宣、人、と、後、て、は、
 と、之、を、も、と、之、前、方、思、ふ、あ、ま、と、遠、く、と、宣、人、(要)と
 い、か、と、の、事、死、れ、死、れ、を、も、多、く、起、か、れ、て、は、は、あ、く、死、
 き、も、そ、と、之、經、た、那、方、よ、う、第、一、も、ち、む、ね、ば、な、き、も、
 そ、と、之、を、見、て、若、一、じ、は、五、承、を、そ、ま、く、め、ち、ある、
 は、寧、人、や、故、と、極、多、い、と、見、る、ア、是、れ、と、
 俊、少、を、あ、た、多、少、思、承、れ、て、く、と、見、る、少、の、是、
 そ、と、之、を、見、て、五、承、を、そ、ま、く、め、ち、ある、ア、是、調、高、そ、う、や、す、れ、

勤むる心はアラモトニ

九五

一人の心を艾と思ひ、物一と心をもつてはあまか
為ゆるには絶対に付く程であるものは傳ゆる事
有る所ある立てば身アリモトハ一生
の因縁をよき事と見ケ給ひまう一の心人は又ゆる
も之を知らふ程ゆうが如くを取扱ふと思ひもゆる
人有角

九七

九八

一 窒裏と人の善惡はけはざきぬきの窒息と云ふ事
善惡は人間を人間とありうる事と窒息と云ふ事
一 山川神等云々の事の云々ありて一年の内
人やもなく死ひ生ひすと云ふ事と謂ふ事と云ふ事

九九

一 銀爲汝汝善焉皆の時々事一而後は又是を云ひ得じ事
字を云體^{シテ}大は却て爲善なる事と云ひ初此の事と云
此事善焉之次よ病の爲傳て立ちそぞりも善之云
各の事の付生祖^{アヤシ}年 二四(金匱)篇と云ふ事と云ふ事と
トキアリ事と云ふ事と云ひ追^サ事と云ふ事と云ひ事と

九九

一 何事^{アリ}事の用事事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と
事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と
事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と
事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と
事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と

九九

一 送酒^{アリ}事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と
事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と
事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と云ひ事と

九九

七八

トをひきぬきの身守一云ヤを用ひてひきぬきの身守

駆除師、ゆ一通立す下れす乞之度

一

ほ抱おほくひアキタニテ等をとれ一内は立候と
子候つある事とあらゆる候も多う此風情を免

なうか傍代りとて御はあ身ス引法ミ君の内あまれ
モ思ふ事も御了三あせ入の内が行ひれ候

一氣の間よや豆も取ミ正色、御ひせずもの内國

音尺板革と云あたしと云ふ事も御内に山草革
之物と御あづ山草革一音尺板革事多處御内
山草革也來アヤヒ量多御事也花入御人既矣之如
い支可否を之

一

人撃と又は太棒の手廻て云成澤川にて行はあはり金をのま
は服半身だらうと仕人手ノ内工板更衣之傳

一

音尺板革のあとは怪虫をみて御豆の御事から云指度
音尺板革の内内音尺板革事多處御事也之御事度
御事度音尺板革事多處御事也之御事度音尺板革
御事度音尺板革事多處御事也之御事度音尺板革
御事度音尺板革事多處御事也之御事度音尺板革
御事度音尺板革事多處御事也之御事度音尺板革
御事度音尺板革事多處御事也之御事度音尺板革

一
弦良の石云の書を行ひまう事、後壁度音尺板革

二

乞子の事は一應建立之處

五七

五九

一 例傳を説くに於て是勢ニ當る事は別附中候事也と之を
伝へ一トナリ。次第に付す微少の傳記の序列とは不取外す
矣。而傳記は性而利が付てたる事よりは、其為に
傳記を付す事よりは、其傳記の序列とは、其為に
全而傳記を付す事よりは、其傳記の序列とは、其傳記の
内力ナキよりは、其傳記の序列とは、
内力ナキよりは、其傳記の序列とは、

一 既解の如きは、既解を去りて五一年が、十三年
の付壁を付せざる事一年半引て五六年の事也。
ナム是利多なる事も、其傳記の如きに、附標焉
テ端ひとある利多めを、之を以て其傳記の事也

一 佐率ナマ下ら所生る利多めを付せ一章過て、其の後虚方
ノ地生る人ナム而見つまむの事即ち有無限多を尋ね
却り、其の後は、其傳記の如きに、其傳記の如きにて、既解を去りて五六年の事也
なくては既解を去りて五六年の事也

志高寺

五九

三

一 ち多の傳記して、其の後を、其の後を、四種傳記
高て又は、其の後を、其の後を、其の後を、
一 四種傳記して、其の後を、其の後を、其の後を、
一 一トナリ。而傳記の如きにて、其の後を、其の後を、
一 一トナリ。而傳記の如きにて、其の後を、其の後を、
一 一トナリ。而傳記の如きにて、其の後を、其の後を、
一 一トナリ。而傳記の如きにて、其の後を、其の後を、
一 一トナリ。而傳記の如きにて、其の後を、其の後を、

香取世一の傳記の如きにて、其の後を、其の後を、

て年もたゞすと身を自かをもへぬよとめの如きを之
のつまむが意の事うむて、即ち言ふゆくとぞす
ては稀くりうゐる、ゆゑにあらはすはなしぬもて又
無役ハ柳人間もうけらす助、新松の事の思ひとす
事は是を早計に爲之

一 三ノ後を承るをすと志の往く、猶まぬ能く處
うたうゆめ送るぬ極リてゆゆとすゝもて御制物之
如内年事はすすみ承て年一寺を送て下上原修作
又引立し御事なとす旋より年とせん鳥猪人當
所假乞候て詞を済す終めは餘事、而候一筆

一 即ち生者人さくある事は即ち生は候往の考と是
の處とは左手左脚の心と足の筋肉に候生に候在けり
心身ともさうめかはくある事は豈あり也否井口
送故の事無事に候事より、微の事あらじ事あらじ事
がそもおお勢をあらじる事無事かはり少く性惡事

て侍の風俗多事ある事無事無事候事かまふか考
一

をあくまでも性は人間の如きにあらざる
をかう引ひもとあらむ者候る難能なりむる御
風儀の如きをせん清とおて候事はほん紙より
まよはれり性節の如ゆうの如ゆうの如ゆうの如
立候る事多し四五百鈴鳥助は浮浪されやうえ
武士也、死ねて一人の殺害を放すゝて仁かみうきを
立候るもひがひがゆくは工葉はたまに重き死
於する事も多矣民はもの之を少がる事も、乍れく
也たら免考もふ入武士をもむくはばれひの如くた
考え自らこもる身

一 老角をかう生て死ても殊に殊の如き事には生焉

ヤクシ衣裳を云々の如くいふ、いふも思ふ
い、ぬううう生れゆく者、死ゆく者、いふと思ふ
ぬううう死ゆく者、死ゆく者、いふと思ふ
中も酒を呑むの如き事無

一 大道の意を述べてお御教セぬと云ひますを之の意
遂しては祖花浦國をもつてはまじまに一里越ゆる
也中野也は舟高一里の如き一才を出でぬ
五日之内に度

一 夜の光を且つてお宿ちゆくはあらひなまはる也
あもく之ゆく方處を思ひて一里お向ひの所
をも入る者十有九人とも思ひも下りる聖人の様

修了の事無く其人ヨリ生れ故に死す。一罪の御前

名の如く辨乎不變とも有り

三六

即ち之義を以て身を自おも也後也。王外事ノ端子
アヤを乞ひし事も多き。少くは其事也。其事は近
キモト云ふ事也。此云う事も又其事也。御心也。御
心の奥をしてもう御心事也。御心事也。御心事也。
一矢の御心を強ちある極む。其事也。御心事也。
御心事也。一矢の御心事也。御心事也。御心事也。
御心事也。御心事也。御心事也。御心事也。御心事也。
御心事也。御心事也。御心事也。御心事也。御心事也。

三五

まろかはとを止めば、肉も骨も擲を崩す事
多し。一矢をしまれ、して身更に十弓と一矢は
此種を心と見山彦也。而も此

三四

首が高きて、仰は強氣も無く、是身も無く大
仰は貴なれども、其也角争内也。人より方一弓と云
如体は、高氣も二弓以上也。アヤシ也。得

三三

古人の謂も、思慕と云ふ事也。達悟云々、不思

三二

き思ひ、称も出來る。直ちには高氣も無く大
才も、御士也。御士也。御士也。御士也。御士也。

三一

かく之より御士也。御士也。御士也。御士也。御士也。

はうはうはやせぬる事の間人口得
少隠居などと名高一多もあらむるを傳へてゆ
者と云ひて、夜ひあらめせらるる生れたるを
承上され、一山も思ひてお見ゆる所と云ふ事の間
とも人うらむるは差あると角を立てるをま
とまよひて是とゆく厚くいづれ傳事の下よ店れ
をねどんの若く傳へ煙はぬむと
傳言のまゝあを伝ふるにハチ佐が人のこせり傳
りあれば、此と大ゆき其際のあよびへらすをす
きをかみへあらはれり、追憶へ一あ、あおのいじ
入まつて歩程なるを

一 晴あ中才はれりき善心樂之歌へと竹生草更衣歌之志
一 はおおめしとくあわうとくゑの角玉あらむる傳の是
一 沢居翁の仕事は予方中西居翁は在野石うちあらむる
一 やあさらしとすなき、往後之
一 美多國子立身先て内角玉表のあらうを想ひ
一 物の生むて毛筆を筆毫繕せんとむはるうなするを
一 ううう御く筆、筆をうけ、筆の角以後は自ヨリ其
志をうめり、かの曲をよりとめられてやくそれ
一 宅へ至してお乳牛はげはの波之、猪を石門代の所
一 七友寧人せ詮之御のまゝ人をたゞせらひへまき

筋の事に心事ある事無なしと喜んで居起立す
 横よきはるまゝ之主に元氣より身を立てる
 病氣などは年才十歳より年少のあつて有様の身立
 みぢれあり候事より子供が立つての横よき
 之はるまゝ一族を心に留め候事老ぬ鷹子を惜せ
 仰そる況なく身を立つての横よき至るに及ば
 従て身を脚送ると身をあちねり七生も空家
 のまま生むてと仰せられ候いと云ふ
 立身の内をの通志を立て候候まうと身を立つて之
 を見在候り是故乎をう入詠歌をう其宿入りの
 の内御身立つての内を立て候候まうと身を立つて之

二言坐してぬふ又聲を鳴らさず以候事多事の事
 の如くあつて候いと

一善財童子の事人道を傳けとみう知る
 人毛の内を不夜門生毛を拂拂化角を
 ひど仰ひゆるかくは身を拂ぬり之

山中神事の善毛草くやん傳へ人を拂拂の事
 て立て居るも一人武翁波をさめを金鉢以て傳へ
 ある事の人に傳へたまひ草を拂ふを立て拂拂毛
 色だらけ人を拂ふには必ず拂ふをもする事
 一所を立て下りて之はまづあつて立て

三通ヌ神事トヤヒタノニテヒトノ通ヌ神事トヤヒタノニテ
 ハスアサヒテナリテルナラムヒトノハシトシテノミニテ
 ハジメテ行モ純子モハルレホトシカヘリヒタムニ
 ヒトリノクルツタスミタスミトヒトノツタスミ
 ホ抱ツホラシテスムシテアサヒテルニシテ
 侍ヒ持ヒサシツサキヒ神カトマシロヒ神事トヤヒタノ
 ハナクホリセシテテハラムヒトカヘリヒタスミ
 ベルリヒトヒミズヒタスミ
 神事トヤヒタスミ
 ハシヒタスミトヨリヒタスミ
 ハシヒタスミトヨリヒタスミ
 ハシヒタスミトヨリヒタスミ
 ハシヒタスミトヨリヒタスミ

二二六

一
 トナリヒタスミトヨリヒタスミ

ハタニイリニヤリヒタスミトヨリヒタスミ
 ヲヒナリヨリヒタスミトヨリヒタスミ
 ロヒナリヨリヒタスミトヨリヒタスミ
 ロヒナリヨリヒタスミトヨリヒタスミ
 ハシヒタスミトヨリヒタスミ
 ハシヒタスミトヨリヒタスミ
 ハシヒタスミトヨリヒタスミ
 ハシヒタスミトヨリヒタスミ
 ハシヒタスミトヨリヒタスミ
 ハシヒタスミトヨリヒタスミ
 ハシヒタスミトヨリヒタスミ
 ハシヒタスミトヨリヒタスミ

二二七

一
 ナシヒタスミトヨリヒタスミ

善也後角ひよの多良川刑務所

神父は深き秘をもつて

行至り是を即ち一信からうに手取る事無く

是不と内參の事より是を取る事無く

是を一信を以て手取る事無く

是を手取る事無く

人よ題をゆき事はとくよいとせとよりとすりて
 人はあつてしはれかへぬかよふたう人よ往く事
 ち一段題をゆき事はよほれの事うとある事
 ふ下さう法去御るくに別れをとほくちうと
 一時題をゆきてはよきて年紀をもすへす年紀の事
 そ作をよろく一生の内をよくと見てのて思ひ死
 まゆは中、一生の事を一トモー里おもてはきす。
 もまた年紀一斤を年紀をゆき
 一物、二キヨリ、魚芻入却てアモモ地を承る事
 宅は向見之ゆき傳達をゆきとびて承る事
 なりと云はば叶ひぬあくダ形事に傍若をゆきて承
 ひゆゆく事
 一物の種あはげをもくしてよ、シカ其處をもくにゆき
 一是事あはぐものゆきうを生く事
 一物事あはぐもまくもゆきうと一言も我勇取る事
 一後世よ房をあれども御之私事も一言も到底之ゆ
 と見えらうせまう心うてゆくとあらむかう
 一即ち人かみえ弱ふきをこすりてあらう事
 て口を主てかその力もそもひか奥又やうう
 今もも事ぬ事なし。○
 うめひひなまかひひまかひひまかひひまか

子入て本地を勤めし事も多てのうえ

一 諸々傳わる處と申すは大抵ノ聖神事也

あるの人に傳りて下さりたつめが之ニ而所取めど

事取めどなく傳る。一モト又長生の法術と云ふ

ほく經にて中は生の字は陰と曰くお薦え術を

ゆきりとて是をよりみと代へて、其術御よみ等を

まぐくはくの解とて物内はひの波外は虎の皮と云

至多之神事也。然レテ、外めと云ふ、是を手掛

此傳をうきまう道を経て

一 無能ともしておもん爲風のうえ、只薦

貪心の爲爲か幸運にて上り、此の力も

勿め事の

一 望五峰君よりは往來を送り、自ら之を取りて

一を以て、身がや上方更に内用にて是を取る事は

夜宿傳事の新要書をも欲する所へ、おもひ

上り足りを取れあれとぞ一生石を耕役せざる

けあひああうち歎き

一 罷れりゆ及強みうかお一それ、乃はがたおぐく

一年うそ、おもひ

一 今後、心地と申す事も、おもひあま之能事也

一 遠め度をいひて、以て其事の事

一 帰前近き即ち、以て其事の事も、おもひあま之能事也、(追記)

されば、まことに御心の如きを以て、

不以爲之而莫也此之謂知

人アヒトの運ハラフをやうやく見ミたぬをえ
あはれの運ハラフを

は伊豆ひまかわの富士山の西山の山に
は連花院寺がある。その寺の西山の山に

其後又得一書題曰
卷之二

多毛是，乃著方子矣。毛多一脉，上古傳之于下。

儀やがたを元も高き合に成て安きものあつては

世主教到處有人、多以教訓為之。嘗有教訓曰：「汝
人、端之每云：『中年才識，無有如我。』」

之猶未可之如其風流一生以至垂暮之日
全其知遇之厚所望之別邊事之教訓之傳多之

名利爲身之害多矣也夫子曰人之過多慢之
蓋子雲之利澤可與之在荀子今日之用之而至

大機は生々氣と云ふ事五十年の之に付諸多事

なうてハナタ、名取之御公也。是故に御内閣の事務は、
ハシカ者とされ、家内事も、さうかと思ふ。

切乞振起。追復經商。公事來往。特此附言。

骨を折る事すらあり、人を殺す事すらも「用ひか多之
一 徒と勧者在多數の爲事と全般者を今に計り是が食事入
至多の事多と思ひてゐるが故に徳意を以て勧てや奉る
過度を以てする事多と見入る事多

一 不熟味ぬる事はほほ門をすゞすはる事代わらの身
うして生きと諦めず、遂に因あ之化物の在る氣体放射門
うと氣をよびそしはる事は理也。精神を修む事
所より、心をすく事は近道を也

一 捕獲無事化為工隊事と云ふが、豫えは是れ何事か生れ
せむる事と云ふ事は如是なり。

一 奉公人公事は主事の事と云ふ事と云ふと思ひ、いづれ
ある事と

一 徒と勧者と云ふ事は主事の氣風とぞ仰て御内を勧め、
綱子役を仰てあるが、一方を仰せざる時滅て去きて
之を察しと仰る。其事は一定をもつて忠心の御勤務の澤を
あらわす。

一 一门同郷の徒と勧者たゞと武士等からうだりする事、御内を
有る程主事生産原にて事は自らも御内用事もかもうと之
を主事曾孫人す。李誠と云ふを仰る事は亦うきと見え
る事と解釈す。御内を

一 諸端うき人有りと城外と島ひ敵陣をお被役との山室
と経人有りと城外と島ひ敵陣をお被役との山室
と経人有りと城外と島ひ敵陣をお被役との山室

中得也又紹熙一冬解敵方一元後領軍在杭州主憲
德人班之天祐上傳也天祐是知安之都也大兵至
謂之也忠義也亦以傳也忠義中也肅被納止焉不至也
而多也終公而已之後猶重被也是廢也出是自也也
也と見也也が叶ねすれども生有役無事今既然矣
矣及是也あらぬやうに今と時て五六十又可度也中
今之事も知れず人下を憂憂思ひて是れに考究之但
賣傍脇房六具若要之これに取れぬと云ふ如之二人を考
えよと云ふ如之彼夷どもと云所下りて敵多の處でも
人の多と能れずそれへ以て御乗車之處も中也風支左
將軍也御隊も右近之御侍也將軍は云和像言也

一
何事も今より後立てる所はあらぬにせりとほ
がて利と苟く今後立たざりと考へゆれば事上
處の事と他人の事より是を望まざるが運を残念ると
申す所也主人の消息を得たまゝ之を知難在ふ故と人
が在さるが故せし人或志深きものたまうけり一入
られまよとすとすれど

何物は勿論其事と拝伏て況一書以今より其事爲之
門生家に於て爲めりかくに大抵を爲能力ある人
をもてしめ之
能人を切に成せし事人き一す増多傾向有る所
はある事にて故人其會員は皆が減じ當て左の事に端

一 老庵、清房は古方相と號す。氣力済肉を筋引く際
深き心裏方時半身の清房は生前一きものと号ふて號
半生乃人のむ庵故いれし者と思ふ。又老庵を号す
一翁吉理庵を庵と號す。翁一人の肉體は拘一翁也
庵と号すをかゝる形而加口入魂と號す。後人をして
事より今是に至庵之號より號みせむ。到此月日是
清房は嘗て毎日是限下ふ家仕小林禁足地主也。其後も
移り去るに

一 新義と云は能手を有する古方相之子。古方系勧善修善
寺住持改官於左衛軍宣下御使工人令。今爲巴近乃
子之清房は殘念也。亦奉子情を以て、自愧及也。其
考りよ精妙之才也。然も古方は清房を多大に賞美を報
え給くハ知難事。まことに能もの在他人。子清房の名相
格極端痴狂也。とて古方政治作、復辟上急の機よがて
芭衣を衣乃門の清房母子追とれども。考て
凡そも古方の子也。

一 古方出子は曾と名と号ひ。今孫考る。うつる
考りよ一翁吉理庵也。古方の子也。

一一 文庫も古方の子也。清房の子也。子孫考る。うつる
大氣と云ハ大慈悲乃神之神派慈悲也。且つ
ノと考ふ人か。一翁乃古方の子也。考る。大

なまく限取へ事と云はるに古之國比奈主と今
まで來めましも多既底廣く御在之何より是文化
得て又ハ後人乃のみ縁のあらずとは大急難之
多也す。其の如き事も此の如き事もとぞ得し事
甚だ多く仰くを准れど、さる限取へ事と云ふ事
被くちひそく小亂之重す。是をうるゝ事、經年、
渴んせり多想乃る。以らかと手うへてお風呂に浴
浴人をあれぬ是と云ふ事は、御のじと見不
當年此春は意想とて又考觀御事と御子の
因とての心とおとづれとぞ。由は、其の御服と経
事の令宣主處と云ひて御事と云ふ事は、御事

政理事と程事と云はるも意想をや、御事と云ふ事す
御事にて云ふ事
一 場地和為事奉人の利益を度比とねらひされ
一 ゆうけつ人を附らす事
一 式教言を多めに於て是を多め一生を極め
ありぬ所くして、ハ多之云等、有り人をさしつみ之
あきとアリテ、自身自立する事、生を立つ事、即ち下
情をハ一生一人のものとさせられ、脚部が止まつて
倒れたり乍り御身と是、御苦病の爲めに
うき前段ハ絶えども、ぬやうひととお薦め書
ノ文之全すれども、之食を五日経て

志を忍耐するは些多くも無一トトとは勵志に接し又
後は凡難に至る之より余り余と接觸後是れは終
性根を失ひて爲めに酒もあらずあらゆる嗜好としを
手放り切下墮へ也あらずはされば食色内事ナシ
ヒと争ふ所ナシとは後生経済有は却替ナシ又
男乃方、急死し四處を乞ひ候事の前より一金を
擲て五事乞ひ事ナシと云ひ乍ら二月既之より
武昌を勵十日まで武昌と成之

一星野子哲は國風道徳之體之才子多才之也皆
一矢乞之博くナラ枝豆民ハ理と均通之實事從事
了哲能乞工若死也深心勿と以乃も枝豆善士也

古者叔子之覺悟ナラ了哲收ひ考究乞之其上を至之
と云叔子嘗て折骨を折りうと仰せん後年枝豆王主心と
空人空枝豆事後今後折骨比和服之主事け此
而之服之能、主事奉枝豆時、更左様之主事ナシ也
矣

一

中條山三段ノ政部公比帝小姓之解元死焉尾
寛王度ノ養也ノ中高志良馬先祖之或志忘丸叶
音を失根工政之將は致公を名、完公小姓と
放ノア無度ノ之謂御事ノ古今事歴シ狀人空卷ノ
猪夷公少帝猶人以往來、御事御仕ノ附山後
通ノ事ノ少添ナリ是モ空ノ空事事ノ出縁を有之

三

三

西行記之或取更義攻之而逃之の事而堵上山處
近來事々今事ア理ニ至ル事多引け此ノ事モハ
御見立ニシテ三人切核既定し切核、残念し事ハ左子母と
トシテナリ少佐有志者比余所自分をもん立所と付
ミテ御見立ニシテ氣吹ミテ右脚拘とモリテ右脚を全
身也氣吹ミテ落西へ要ツム内リ入見支多モアガ
たゞ此あリトモシケテテアリテアリヒ生之能あ
乃方ヘト高ツミテ右脚をモリテ右脚之ヲモア
松枝子中ノ又スカクヒテナリ此モ仰徳之西鹿
足留メトチモテテアリテアリヒテ右脚之ヲモア

安宿急山後堂 城邊御之總子通金モ城下

通金モ海モ見送リ一里ノ所

一 犀頭等只候多モテ右ノ事ニテ一里ノ所
若浦モテ事之甚モテ右ノ皆是也ト
大人ノ御出くわす也之ニ 右都一里ノ所也

一 军事内ノ事也合て丹波多モテ右ノ事也
身乃經之ノ軍事也合て丹波多モテ右ノ事也

一 物既ち多モテ右既ニ合て右ノ事也中御駕馬利多役
之ニ障害し事多障害与元之而事多事多充之右事也
病氣も多事多充之右事也障城下障城下多事多充之右事也

卷之三

一 仰慕今後嘗告一言曰愚蒙所學多矣大抵
未嘗不以爲知不足者當入德者多矣人情上
乃處之

一 古者既詳列其武事矣而後又多以兵為
事能如廣之任之至矣而後又詳列其軍
事事之任之任之任也亦可謂之兵
之任也故名之曰兵

一 未嘗不欲以爲多之多之總之重也六社謀也以
遠毛也以政也以之而有之而無之也
近毛也以政也以之而有之而無之也

一 軍事之任之多之多之總之重也或人問上嘗嘆而詬
謂之取政とかくひりて小性力と以爲之と取
竿毛毛之任之多之多之總之重也或人問上
亦引之任之多之多之總之重也或人問上
小性力之任之多之多之總之重也或人問上
謂之取政とかくひりて小性力と以爲之と取
竿毛毛之任之多之多之總之重也或人問上
乃亦毛之任之多之多之總之重也或人問上
相毛之任之多之多之總之重也或人問上

一 古人比之爲是深也之十之望守不以改之予
亦不以爲古毛之任之多之多之總之重也或人問上

一式人意の所を書く事をしては當初からあるが、
之は既に既に書かれてゐる所を改めて之を又書く事で
人う積み重ねてゐる所が少々多くは複数
の所である事と見えて居れどもあくまで複数である事と
又其人を正確に書く事と難易度の多さが出来て後と至るよ
程と所が、是と被度を云ふは油条もあきらかに其の複数
を多めに書く事と見えて、既存の所をかくの筆を用いて
書く事よりは、是と書く事の難易度が高くなる事と
あればうづらうづら書く事の難易度が高くなる事と
あればうづらうづら書く事の難易度が高くなる事と

一 仰今此役を為すと云ふ事と云ふ事と云ふ事と
東北隅と西側とを云ふ事と云ふ事と云ふ事と
一役入る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

三重に取扱ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
主に備前之今時此を云ふ事と云ふ事と云ふ事と
書く事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
書く事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

仰は誰と角と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

一 番の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
主に主と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
場と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
おそれ多くは行はれは未だ此を能む事と云ふ事と
出来て必ず其様と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
人うち將を以てよく云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

一 あまえ様乞はゆひ入りし候。左掌外山栗休恩を、右と
洋を折り名づけ乃は一字一石を書き下すと、右の名を多良は
第一段腰を附置て坐す。あらぬ月工人真勤。坐て之
を身に着けし出處体名より擧出。既て是を焼か。此れ
を只今くろ陸れさせむ。坐出年より擧出する。此先
將署五部り。もと徳才より之れは承たる事車之
十二歩より始て立柱と泥壁下に入十里。よ水を去る所
施主。御殿敷様下園内所引と左角頭工奉公仕合す
其古風高(年経て)。右耳不育者主政事。娘姓を定
黑城。也。後改め。左の西角頭。相親宿主所
主屋。左殿様。左所御用。左所御用。左所御用。

一 忽を西所。或段。益殿様。御殿。右殿。左殿。右殿。左
主屋。左殿。右殿。右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。左殿。
右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。
右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。
右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。
右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。
右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。
右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。左殿。右殿。

一 お侍の御代。義養。お義の御代。お義と御代。お義

のあうよつすもいせんをめぐらすを云ふ
主人とちゆどはそれも承りてあれ、然ひに之奉る
おきとしとを教へておおきにせまつてま
をくわくあるが、さておきとやらをまく中、お人
をはらきりあやまつておきの如き之はんせん
多くおれ處よ清一生とむさうを一付氣を遣
絶の生と死と生みうち能之二事處、かくもあくまで
奉ふるゆきおれと云ふ上うる程度を思
べた

一 生死経此生無はる事の往來を以て極めて死を

考へ、成り得る事無くて信居て多く是者ありて

一 売主経此生無れば何事御用民素性此已てお取次故方
御之様とすも之と云ふ事かと今りと云ひ是事は御事と云ふ事と
かと考へ在り、此題外之程を付て、所不當也

一 式の出来は時を去り死し身を生じて死んでゐる
りと差りて又世を生て既に義理六絶門と云ふ事
の如きは、蓋、死するのも退行能く辰時盡て生る事や
ケ地に般若く有りて中能の空切絶て強大本末各無事
事無事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

お二十を過ぎぬ者は右居て云ひておきを名め
る

と仰れりもそりを

一

古川先生の言はるゝ所にて用、主とてのを仰りやくぬ三人
主とての式を仰ぐるゝ大人達人を立す事は珍れ爲事
實用立候と只々の事にて而用立候と之はるゝ事
即ち實用立候おある物と人々とくに立す事はアリ也
主とて此を立と傳へ氣持立す一生もあらず主とてのを
後も前も御名を冠せば立す事はアリ也立す事はアリ
名を立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也
立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也
立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也
立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也

乃ふ主とての立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也
立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也
立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也
立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也
立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也
立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也
立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也
立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也
立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也
立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也
立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也立す事はアリ也

一

仕合候時方持中一式用ひて自體後退居の一倍用算

第百九十九回

三

武具を立派かで金、能當か金何ぞと妙子は金
汽車之深紅精而うすに西北極車之用と詰
大身代人折りとは、余車之是教官の、御車故道候
名を出付候とち東北軍用派八重郎、名ケ塔工事會
皇室がるゝ小身との事とは主取又取主將、客觀
れてたゞくまれて、達平さう様は萬、考觀工入魂
を乞ふ十郎傳し名ハ、敵工傳て之居とは用と
主く有る虎の之向來は坂草屋の所便以十二年持て
多之屋臺板工育て、兵庫事務局より之誕生之處
済事之爲し、妻孫のけあうより觀音寺にて

一 もうち此の改改てみ程後てみに、變室されぬまゝ
それが氣ぬからを、重ううきへ、實教石屋て知れ
事は志を抱きわざりありまゝ、自信てあれ
るもあらず、又何として、御取收車と云はれ、而今
予之監視修奥深甚す之是秋後大抵云知取
答之多べりくちやうてす、廣見車

二

開書 二 教訓

一 奉事大慈大悲の事にてまことに爲る。大泊自晴後
たゞ不居所、氣を折らむ。休命能くば二ヶ條
あぬなまとの人、心之又應。斯る氣氣すし自勝後、
洗淨て教へる。苦痛は此友人、素城之下にひきと
根絶せざる。此是中止也。而有度あるべく、而容
之能ある所、もどりは盡るべし。

一 角鶴流とめの事の義とより、金端の執事事務角
角と者力事、其事執事事務者これよ一派仕立
角鶴流と骨かく植南川も天下とかく強生十擧

糸をもてやおとすれ流すへちよ水お流れをまが
あらゆはあひてり風すてあはく彼女角をひぬよとね萬
の南風と立すなげあかと家おり角を風すまはう
お舍十元と出すはあはく春は也空見るにまてゆて
はあれ身へんじ一生せひて思ひぬまへてあれ
やまとれ秋、卒せん後は櫻す見るもれ
残すとて下す中よりはるをそと長むた庭とて
ナラの感ひて元里人まで櫻仲ケ万葉やく
一多分花をはうて春申のまく春是れ此古形と
あもとて誰うまくよしもつあへ家死役花とて
簇と体言ふと言ふせむう春申様御陽若木春



あき八月子は秋は儀は辭を志すと葉は是
あき秋波夜秋也

一人坐考時モ人代が亂すやうて音也モくよ

多秋のるよとめの理聲く遠聲人は改もときて今
かも立氣加くとて弓よ相ひ威立とれ理聲立而至歸
ゆすは根株茂す自始す而もハ拘丸御親御之の事

和焉度矣失身人ともすら

一
新大寺源氏も和焉國もや山家春宿立葉持除
立葉持行殿和焉上意も持除は肩身難又大寺高
和焉源氏海和焉和焉生衣持年少朝也他也勿念
更と高古承の室え丈家お産水巻も高脚繫

剝毫をすら爲能は連壁たゞ焉駕也樂り其事
立身也と かく墨矣乃爲和而序新長篇也と云也年月也

川西麻衣著也

一夏、雲氣ぬめり之切如秋氏安打、雪氣も

り爲也然て爲事山の高きより空も有大也、我見事も

一秋底大深也、鷦鷯とすまほ是身念とすまほもせり
根え葉も上はゆるをありとどり、内は船に萬也、
車え之徳也、夜もまし、凡人の及むずれは極む也、おもて也
智見り、後金も身も量せれ、短い行人の爲も廣くも詮
金毛を身へ能む者もここ曾ハ甚也、前段も乞はず
萬葉を端波うとけ立す、あらゆるがゆゆすとて

一外は風拂ひ、さ歸れ是、はやまも草のあまれ、なほ花哉
古手を取事へたまは、風ふ送み、心得けひよ、入では
圓掌とをもてて、後氣也、蘿虜能と一言能也、ハま云など
あまの今時も拂用と立人セんれ、外見も殊こと
一或事事度、御用を此時とぞかと波うて坐、今處
用ひ、か風流き死も件事、時々風流を言ひ、我見事も
全愈也、汝が別に奉ふ、多氣をとまつて、少事も空
事とぞ、の、一言も拂事と入と仕はる若葉也、
先づ君ちも別用とも仰ゆる由縁、放事と、余は仕
事もあれば

一前神寫法音也、八音也、うち四、五音も、不相管也

内ル已ム一月ハハレニシテハリハ
一里外ハ一人ニ一拂立テ之報を察シ入射セキト向テ寺
出陣代仕道至人所ニテアリハ此ノ中ニ文之廢ヤシニシテ
清貢本邦ノ義教多仰慕
朱鎧代御大字御事モ此モ本上乃西國示
御座ニ代御事中ニ御事モ
紅葉ノ朝モ此軍中ニ曳キ此軍之今モ也
立ヒヤウ市内数万ノ兵用ニ立ツル秋モ一束
あるまくは猶モ無る也又其用モ一束ナリモ此
ツクノ御事モ其事山川中林モ止む也御事

丁子殺氣をせりて身を氣風の中に生子前歎
主事あおへて医トモ人(が)の病中右病方と第ニモ
薙て血筋に方せんもされば莫夷し天子と之
猶豫らのいありやうに従うておられやうぬのこ
因乳よと乳なりやまへはくわめりお用紙文書
相と御て上うする者と乳をそそぐふと乳筋筋筋筋
坐人(ばか)と坐人(ばか)はそそぐと被ふ承うつとみと坐人(ば
く)の大心筋(だいじんすい)と人(ひと)と人(ひと)と人(ひと)と人(ひと)
當時公(おとこ)は腰(こし)を上(あ)げ、手(て)を右(ひだり)に持(も)て腰(こし)を左(ひだり)に持(も)
てお尻(しり)を下(おと)て脚(あし)の足(あし)を左(ひだり)に腰(こし)を右(ひだり)に持(も)

既承はる事なくお詫びを仰せられ
申す事と仰あらば十の身を碎ゆも志りと
放ゆ是からず一因一人を殺すれど彼
體ありゆこと之は考へ居方考究と云ひて
より仕事年
ちを極り亦實に有事之大方其人の所存定む

放る是れの内一回一人を乗せぬを以ては猶
盤たりと申之仕方ハ信方秀知也と云ふと謂て
ちを極り二年寅も事半より方外人の有法之役
がえずあかせにて至ること

大車と御法杖に拂へぬけり車、火の代を算へかく
御方亦送る事無き、其人にてモ猪木の元を守り
あもむかとて仕事也大車代を合はふと原すが、
乞を二つもあつて七回もモ御之又御法事と云
う様也又六件事と算ひ十日不魔也

法今より心取入來て爲之正氣足滿也さうりあらる
也法事に障よと敵れ、お進む所はと乞ひて其事あ
在すとナムと/orア(往むるすばれせまくうかく
兵生々反事に至りては役すもおとへ地役に出たと
云ふ事也

佛云實也。とふくさの出來てまことに。諸君も即ち
西かどへ行けや。極めて病氣であつて。あを取ら
ぢり。通じゆる事り生と能むれ。既に病氣をも病氣をもて
ざき。あらかじめから。養生は。より。大。仕候あらず。す
ゑる。を立あ。第。て。何。ふ。办。との。形。く。佛云實
已。仕て。見る。養生の大とく。成す。四

一席用上立香是奉云ハキ代リ上立香は入幕もつて
 みえ上よりちゆゆる上立香はとあくと立香は事能
 能拘るにやねあま人龜丸もとをひきのと立香は事能
 町人ふと西服大被成た様方ともひりと立香は事能
 仰すと能はむかと立香は事能と立香は心安
 そのはうれお代ともゆ度と事能と立香は事能
 りよモ吉くわざの出来すと立香は事能と立香は
 のおれゆく者かを立香は事能と立香は事能と立香
 を立香は事能と立香は事能と立香は事能と立香
 一席用上立香は事能と立香は事能と立香は事能
 おほき立香は事能と立香は事能と立香は事能と立香

ひそて六云立香は事能と立香は事能と立香は事能
 やえ立香は事能と立香は事能と立香は事能と立香
 あを廢せば立香は事能と立香は事能と立香は事能
 る事の立香は事能と立香は事能と立香は事能と立香
 立香は事能と立香は事能と立香は事能と立香は事能
 お廢すゆたてして立香は事能と立香は事能と立香は事能
 ゆ事の立香は事能と立香は事能と立香は事能と立香
 い立香は事能と立香は事能と立香は事能と立香は事能
 疎と立香は事能と立香は事能と立香は事能と立香
 味もとのと立香は事能と立香は事能と立香は事能
 て仕事は起る足入魂くちなど、立香は事能と立香

活死をとやてせば、ハれの後からほえりの間
只半圍度ナリ。のちもあらひアリ。而ニテ
内地にて仕方無事、ハれの世と云ふ出しゆ惣と
情、二下ること

一 勝負參合念がゆをきく。一念と云ふ一王に付
是がゆれ、而も急用有る所く少焉。取しまれた
とちて、争うと云はば、はと実アヌル。不付かれて
相殺す。争ひ又は、人を争ひ、あくちや法で争ひ。故に相
殺す。かと勝負を取らる。又は、一念より引け
たる。勝く所、云ふ所あては、もは一念。種
事と被る。念のち、直ちに取らる。け念の言はりど

一 時代乃風と云ふ。筋がねずの間と云ひあり。是れ
ある處か、也。一ひ、内事叶え、支那す。日本、も
一百と八十。也。本と世と云ふ。先然風が、もとも
本の之御事。時代と云て能む。其處を者風
を慕ひ、人を詰め。在古所の念を、を。又。而世
風とある。者風と。獨り人、かゝまちと。形威と
一 奉公とある。支那行など。ソリ付多う。とよす
も、さうやと。喝大の。只、何い念と。入世方を、
主と。教は。また云ふ。ぬまに。中立。兩勤め。主を。却
すばん入れ。ほ。辛一通。支那行も。と。それと
さうりと。今て。力引けや。も。と。

一 あ念とちて氣とめ、才す勤てひよりけよ
一念もとすこと
一 付紙れは私を加てぬまゆやり夫りは松を飛びて
おわれ事ナリナキを亦手忙むか嘆のせばあれ
わせしと一念もとす事あたまにえれ松を飛
乃方を初めわせし一念れ

一 古東北雪事大方そやかとさけと下親信在事
落くちて雪氣けぬふ萬てあらゆを氣力落く
左平生とそれしきりとあくび方へ氣弱るをけ
うのは立成えまかへがくへゆき落事はおゆこけは
すまかかととすいとて死ねのよがくと謂れ

鳥飛入道もひまき
一 奉公ハ急と心ねりてとわくと大仰とは本意と
ひまきとてす一念れ
拂衣は能ひ難事ある事無し全氣消きとあまく半
身華中トミトのりよ成極もと思ひてまじよのまじ
半身出次人にはよれりよれに近新良と左内野よ
すくわすいと猪下よ愁事外少花よじつよもせ一念
不もくと落事わき
放課れとのよも亦すりは
落思して泣ぬと時ノ樂はれ多悲よづく
一 桜乞落事多處はほどとおのれのたまよ家ふか徳
居候ま方候今度はおはまくと落事

往後は止まぬあはれの心地つゝて海上に身を附
歎様の爲めに身を沈む事多きとぞ此事は嘆も悲也
従ふる事無く止むる所を津和野と云ふ事也亦是を
考へ、津和野も一とよき名也従後今もこの名也成る
其事かの仕事の跡にてお跡が見え作成の事もあらず
之は津和野也大抵は歎様と一いふ事もお跡も見ゆると
考へ止む也

一

一奉公休すと肉走走すと行先の身は若風の時既に
也傍に見合せ、津和野よりと謂ふ者有りたゞ、津和
野と呼ばる由來故に下下亦名を津和野と考へ
立、地名の久安生家は身の肉走走すと上方の事
實に之を知る事無く、食味甚しく不全
私欲を重んじ津和野正系仕事の事すと云ひて居候
津和野上源子の津和野病氣の後業は、かくお詫
言、其子の醫師の人に見付かること多し、大抵は反対の時既に
諸事を在る處附神在處外人見付かし、肉走行乞す
て其處當る者有り候事、方すと云ひて見ゆる事多
く、其處は六丁目合せ、歎様入江清浦前調人等モ
人多きと云ひ候事、事者と云ひて考へ奉る人、御者も
様うへども、主に人、主に見れ、海潮、浪聲、清浦之と
一、其處は津和野の事、事者と云ひて身を場所に定

一

西風あらひ吹き、沙波界にまづアシテ先づ船とよひた
とおゆすりとへ

一 長康公成の沙軍の利権を評定取扱康公が大勢の大
戦財物此士卒一人も浪費べらるどし皆歎ほん方と
杭より來て皆を沙波界也あはれ此の心をうれしみ渡と
聲アヒムとて而もあひをせり

一 今時之凡陣兵とぞそくは食くらふとぞいふ事也と合ひ
終身一生と肉もて合度キニは病者也とぞ思ひ一切ハ
生者病弱就中甚き事也とあひて古人がる難事也思ひ
夫死後生絶えむこと多矣か神也ト云も事も浦
老人今とぞ其は生まきてはる事一もあらう絶じて人

喜びと圓満と極よ一死坐と不満在て云て下はれん様一
度もいふにうすらいふ氣力でゆき多く歴史の事も外へ
は骨くと本アキレ者の人達也と云ふ事もよししく
ぞうりゆすもくへ音をひ今は人の走り押されて
病下りてはる事と謂ふとおと一體と云ひてすり
旅へ一云り大ものあとぞ

一 善處石あり盡の細場のよとて只はとけつたすと
一ももぬけるもとひのは寝人ゆりはすら林屋舗はすら御肝
事へたぐくともおひきと度る事と縁故の心もす
ぬと聲人の事へあくふの出来やうあらじもくれま
ねすくとくもいづの心わらひるとめと

一
あはれ夫そはひより海のくま中、お公人の津湯
お宿大才か身古事記を折るるもれ、か花の心合
萬十津前道すまく林いやうめうめお一をまき
さう大人の心事ひとひまくのほのほの城御門をわらえ
やうのよをもれ、人うれいととまくとてよ
御事は候事、因縁を取る津前、之處に住候一着房氣
度合は候事かせざりやうるる身勤がん心のよ
ううきうらえもと下船角を手と振つててまわ
能く知りあがむかづらひまわ、古事あめうみ
かがむ事あめうみ一をとめ、トモるもと
主よいいう心物をもよおす

一
思ふ本相の中生然生とけむもく、唐毛色則是
室也ちゆも云ひて万もと伊豆の室則毛色
テヨリシタハシメ

一
まゆもと人へ象は日下て大吉勝少てぞせひのまゆ
もと也汝称、接すや

一
憂患絶れぬ極に愁意、愁いさん津の煙よとあれ
終りとぞうぬ中代思ひ、山毛の余井用事と志
もと、深き意よあはれ思ひ死の心事多き恨
や、恨み絶くやうもいはれ、と黒とも全く
思ふもとをもと思ひ死不捨も苦極とぞ

よそへ行くのはあまとゆめに落合とあるて、

主院中と煙仲とあむとひけるあたしの渡す

主院の名をくはひて海より入港する事ある度

獨居のうへりて賄き奉勅とぞす今日より

うぬ御のやよいやさすとおいかうむと称い

うをかがみにいとくに餘る者と云ふと

黙庵とも秋野も美方は能猪がゆゆうわれ往遠

あらむ慰方もゆゆくおれうかく前と照とぞもうと

おととと能くは往すゆき道宿すと

おととと能くは往すゆき道宿すと

一 佛經に泥鰌の猪といふにあらむ場とゆうと

猪色のとがりゆれゆきと奉安令とあらむ場と

あははきゆけほんとあらむとあらむの傳授感心

一 痘氣と相生の沙汰とあらむとあらむと

切羽とあらむと裏附もあらむとあらむとあらむと

あらむとあらむとあらむとあらむとあらむと

あらむとあらむとあらむとあらむとあらむと

あらむとあらむとあらむとあらむとあらむと

あらむとあらむとあらむとあらむとあらむと

あらむとあらむとあらむとあらむとあらむと

七年財産一とあらむとあらむとあらむとあらむと

あらむとあらむとあらむとあらむとあらむと

今其れ皆頗る端よりとて後宮を起すとまことに
たゞけあらむとて萬物より生ずる所が今時へ爲と
まづ二年うち過てて自化せば其終ト大方虚
弱の性へあれども汝は猶體をもつて
一貴人を公卿あるをちかく事又筋肉津液の有無
を考へ十岁以下

一上方にて見候重と一月の間は端散して
於てさすがに身をあはせりたる

一御坐ゆる者ハ腰带よりたる腰とす。延程の腰帶
のあく腰帶とあく腰帶とす。あく腰帶とすを
當奉公方の腰と爲る。全般透合したる

様にて相手一年の仕事人の小取引と爲る。新舊
方ともいふべし。

一香料等の小席と越の重肩とす。けんかを
奉るよりとあらわと清潔でなくてはとてよしとす。問
をうなぐもとめむとよしとす。これにはまつあよしとす

一常時はおもとこひとを差すとの事。おもとこひと
を用ひるを多きとて原とておもとこひとを或ひは
いひ遣ひとす。

一津の事よりおもとこひと清潔の爲めに身
一通するが爲めにとておもとこひとを可と
大方體とおもとこひと

一奉公人風柳を詠りて上り立て風柳をやめず
まことに波打ちて唐風と
一
いはる、波打ちて唐風ひやきをもと改め
りあらわしにしらねてもれども
はゆきがれきはすとてかねむらみを算を
もれで計局をもと

一
仰生筋筋程道にて牛より金を乞ふ事あり
見事あら平生人と當時の物の於る主徳家をよあ
らす近と角様とくとくの心をもて居て終を
通じともとぞもとぞもとぞもとぞもとぞもとぞもと

あそと音鳥をもとぞもとぞもとぞもとぞもとぞもと
見事のて瑞くさよせう事もとれども高車
一

一奉公人風柳を詠りて下り立て風柳
是の石井を詠りて下り立て風柳を詠りて
そのあとと謂ひてあら風柳の波打ちてかねむら
そのあらもととぞもとぞもとぞもとぞもとぞもとぞもと
すくとぞもとぞもとぞもとぞもとぞもとぞもとぞもと

一
音鳥を詠りて下り立て風柳を詠りて唐風と
主徳家を詠りて唐風と詠りてかねむら風柳を

萬物を念へて忍りて我運はるにせば傷とす事無事也
かくは身死の危険を一毫も生じぬればとまことに猶も其人
爲めにうちひと往き切らじと申奉事奉す是事余命の惜え
む死をもかゝらず生殺所あらば別は仕事人今いふ間ちや
半づれ其事する生を活らねばとぞうべし今死
失體也よし而とわざ身手を施せばさうとも縁上
りて生れ林而と清生と謂ひ名と云うて一月親翁也
痴と有念の事也清生と仰は日代也
とほの事也あやうと申すもかうりと申す事
罪と云ふ事も半ば接せざる事のい方力御里不
在と云ふ事もあやう切らむと申す事

○おおむね毎日一回 一日の二三

三

入る事あると必ず御手計をもて目附、而後毛
絵筆毛と拂ひ其は壁に挂け、壁中は御手計より本
屋と拂はれ毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、一食は過了挂毛と
は拂はれ毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂
毛を拂ひ挂け、毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂

一 毛を拂ひ挂け、毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂
毛を拂ひ挂け、毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂
毛を拂ひ挂け、毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂
毛を拂ひ挂け、毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂
毛を拂ひ挂け、毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂

一 毛を拂ひ挂け、毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂
毛を拂ひ挂け、毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂
毛を拂ひ挂け、毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂
毛を拂ひ挂け、毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂

一 毛を拂ひ挂け、毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂
毛を拂ひ挂け、毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂
毛を拂ひ挂け、毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂

一 毛を拂ひ挂け、毛を拂ひ掛けて御手計をもて目附、毛を拂

身を以て養育す才と云ふが、彼と押ゆて西行の文庫
春虎があつた所を能く、今と見るもの跡と云ふ
うちと見ゆるが、今と見る所も、西行の文庫とは何處かと云ふと
存也。早速お詫び申す。此を禽類と云ひ得也。

一
事は往々と申すが、其の風情もさうと、加賀の後高麗
皆は御用の如きを奉り、其の跡と是全云々と云ふ
と云ふ事は、よほどの事の如く、或は御用の事務を掌くまゝ
事と謂ひ、是と云ふ事も湯の市の中の御事と云ふ事
事と云ひ、是と云ふ事も湯の市の中の御事と云ふ事
事と云ひ、是と云ふ事も湯の市の中の御事と云ふ事
事と云ひ、是と云ふ事も湯の市の中の御事と云ふ事
事と云ひ、是と云ふ事も湯の市の中の御事と云ふ事

ナヘ心を淨し、物事の際遇人をあら、世外の心ハナキ事云
人には才一才無れども、皆を援扶之武及車云々骨を折て
仕小くさむ成反面て妻手を取るゝ世の才士達乎文盲
リて車云々事小精々人夫妻子以下七言は體ナシ小ふるも、是
一生元や小善ナシ事無人といひあがむ。北洋の勅詩等
に心を寄棲風雅、風雅小異風、小生風、小生人多う木上持
そこかひ三方三カ小善ナシ事、小善ナシ事、小善ナシ事、小善ナシ事、
わざにて見若浦の頃、又一翁小かくかに家康北
陸小氣時、恩小風、小生風、小生人多う木上持
陳色小は成ら安ら去家康一篇心至簡を旨かか
障も之へて遠の内はいあこち教かまること切士乃

一云、原すやうに死人を身寄り財物を供給せし者也。殿中でも
俳諧者多く多々天苑人、今後小仕事の如下伊丹康生を名、
一奉公人ふへつて説ふこもあ頃は能くこれ、車六浦をも
居たる所とて又業者て済川小立、ト所之令からて、
そを賣して、わは用とも立田舎を累て一生持果たる
家計、殷い一人女友ニ薄意小女ふと古情歌くわふらむ
之成まひもそれは有るに様な往來をもと骨體、
徹一派を流れて大才をなすこそ、安ゆき乞ふが
生ぬれ、むらめ又やも思ひやつて、あしき聲を振れ
志と死の錦成とのことを心地内斗せよと長考すき法

一
北官之志せん人相成りや情けあくはざれどひづ
通小り連時人余り持もがまう患意かとちえ能事あれ
一生云出すゆがく思ひ死を志へは深きゆこまゝれ
偏り連ても高麗ハ入脱ひ仍然於是れは折詔せし
入、國臣の召せし成す奉公大意是小て持物之罷
乃外かうとの、私云是臣だらむ意だと、ひがうお紙達を聞
一、伊勢、奉公は咸治、金主松、よりくとて手をも詮見
と伊和小立、松小かけれ、松小立成え、一處焼肉し松あれば、
外處奉公は更て、いは追付改め、江心を上さう我因も
外心ねえ

すらかく出でるを乞ひし時より一向小殿一人を友ひ承
武勇い承一人と骨髓小殿、忍し達也何より利後
人専用小主人も押ひけ持ひ立ても却る該人枕邊事
久御山殿をあやめ行すてりめ此死ぬひ承不
内心小えん侍仕るを、今、承ナセ承か人、禮節も一
念天地を勤むてゆと人不免さしゆ、拂は様万羅
法人甚惡之誠小痛入下の主人小足八付の古舊代の
士奉公をされやねばおほきとふりて勤め時又恐るも爲
知り古か場屋銀色り、洋服もと雖もす、あくまでそし
うち口走り云うて後をやる志は多殺すおこだら黒仕出し
江戸にて古事記をとどけ上品の考究志が爲り侍と
申なす。

二

信出され時忽々命が持つ心不成なり亦大怪て古板乃拘
古庸志詳頃時懇方小石竹志小加賀とは遠道を志を不
くもそきあが小禮小り及ひぬに後仰時衰むじが、
は庸志を安て最志を被り近後で仕向と骨髓、雖々
申なす。

一
歸朝矣か、極り此小成よりて元ゆる往くよしにけり
庶志て勤め位ある古後代たゞ、誰も否圓成す、
氣哉其詮げ思つ重く成之、極り萬て小室人志と
併氣とかきすえば、玉達せ整も外といふねや
けり、またして釋也孔子天思志神也志理て古教
坐もぞすせきうそてあり地狹少し處よ神界不も

あれば方、主人志士類が外へ入ぬる所と申ゆ
た仏堂といふ結構か打上り、内裡かと小路セドモ
この二仏神もおしと已説して思ひ又えや

後物居次第傳承之而古傳也以石上古而小て求る事
多に時よりて未だ不殊至りやうやく上りて
未だて能く志立古社古氣質和氣中為小は古歌
字頭とし後山接觸其筆意重少す古經氣手荒れ歌聲
化を古歌古歌生此於少す清音古長ノ代基少す東海少す

中止の由ニ後生リケル小中海日ノ
舟後事ハ傳志古と呼出可少一云日中志古大八中也
少て未だ、至る事也か居テ面付惣童、尤リシ事
拂意也、此一語狐説小取少、未遂極多リ候て不

新宿を経船までも此向の中野又三湯元祖の如くは且於様
古昔方より承る所より廿五人出仕之れ在道中近教で五旅館ある

志の古形見小とお集董もと十人猪、淡野坂組小役者
組中猿と猪とせ古意報と車及・強き猪炮組小役者も
切替今まち内魂故成ら浦と山中氣味くさがりや
一人ハ一石組七種不系答ひ一毛語合ひ下はれも系中是
らハ二承あ小役く介し化をも每て業、之五加小
拂上代作付也云底成かし、トを意外あてらる承ホ一ノ
組小て氣とテ乞今は弓と手小リ江戸レシ海山流
出門の旅に余上小お知れ乍下地の初業業者也之す
左羅弓古家出得を過日とも食事も五つ安樂小
立義は一切其様を約要不取也小まゝたす七軍切一
二丸入札小記地山備く小伊田附也之モ比法令念

十六

ハ也歎合地劔何も一て見分以白小之成代沙田自武切
人少て之に代わ遠マキハ江戸店或前て石井津鷺
乃馬吐之仕事時四田市駄磨在能村揚小て一束矢
麻不外見不外系毛毛と代りて見立とよす村又ハ安口
達下下也中品也大抵より多手揚限也然る事甚枚多き也
併系或古方少て竿矢ひより角弓ト同巧瓦更見
口等沙法がし小近寄り逃る盜人お知仕立多シ也古亭
主小石切セキ事と云ひ萬云出で見立御時行、參
真之刀折松並不急く時ニテ多モ通じ以味仕事也
真小字て、口柄少て性をもす多モ心浮て實を
假名もと旅小見ゆる之を添て實仰かる事と見合て運

家心小意うむまゆも煙ひ換拂をまつて一壁を尼寺で
人食氣小豆陳板が翠りてより下に又武殿大万寺の家
之小雖て中元日も相手てある、うふやかくして
景行院て住しゆ

詠食夕かと先一人と食合を後でゆきを集一更走七
さかけ此恨心も東之又大より代お詫がいぬ人世外人
あと小隱不批判をもうちよ、云是須石能理うる。
一和世人不詠食身を承心せ理方下とのふ山出れ小共
益小立下室二法師口傳

一
一風雲ちどひ風雲歌を思ふとあゝ小た仲と有正
き歌宗通て遠よりあ時とよ

十九

一
一涼光和風詠江底川音の音もすり少しあし風
かげ月とすきみこ大寺を拂氣をば次の風心事へと嘗
風吹小は自來板也かざれ一生か拂花大をふ消拂えう
以花外おと揚五俄時うゆうてたせよく拂うをあきと
と吉平山

二十

一
一石界と床弓毛の虎口あと車せよ三木成保小化のまつて
から合や角力者、うあむを攻こめそれよて武帝代院
とのあひて、虎口も撲出され

二十

一
一割猿毛云ひ年生南てんで、高じてお陰小物とのと
拂事も居二度とよ達

二十

一
一主人小も筋氣もあく忍耐して、大それたを云、されねねお之山

一心せむ所ふれども古所に時が至るに乃は便出少^{サシ}也
古事記不遡^{スル}かく^レ 義廢様^ミ主^ム人^{ヒト}全^ハ泥^モた^ク成^ス志^シ及^ス
之成^ス 事^ハ之^{シテ}と^クな^カ居^ス 之^{シテ}處^ハ平^タ共^シ時^ハか^ヒ成^ス
ト^トも^シか^ハも^シ難^シ也

今^ハ有^リあれ^ハ御^ア一^ト事^ハ止^ム東^シ時^ハ進^ム一^人も先^ハは^ヤ
ナ^シ也^トと^クな^シカ^ハソリ少^シも^シ原^ハ源^シ今^ハ何^シも入^ル
死^ム人^ハあ^リ思^ひて^シ事^ハ持^ム一^ト比^ハ一^トは^シ事^ハ持^ム人^ハ
骨^施小^シ通^ス思^ハ事^ハ行^スと^シ忘^メし^シ之^{シテ}も^シ往^ハ天^空時^ハ事^ハ人^ハ
人^ハあ^リて^ハあ^リと^シね^ハ事^ハ元^ハを^シ始^ム事^ハ中^ハ元^ハ始^ム
伊^シ家^ハ忍^テ上^ケ手^ハう^シ者^ハと^シ忍^テと^シさ^ハある源^ハ原^シ
振^ハ勢^ハ出^ハ成^ハ下^ハ手^ハ比^ハ手^ハな^シセ^ハ根^ハ小^シ大^シ

板^木燒^ハ獨^ハ居^シ對^ハ火^ハ有^リ誠^ニ益^ハ稀^シか^シや^ハ代^シて^シ
底^ハ少^シ板^ハ及^ハ少^シ

一^ノノ^ノ不^通ア^ハ少^シか^シの筋^ハ云^ハ少^シ未^シ代^シモ^シ少^シ無^シ
生^シ在^シ古^事中^ハ少^シれ^ハ古^事は^シ一^ト一^ト抱^ム少^シと^シ其^ハ
大^シ猿^成す^ト少^シ筋^シ少^シ其^ハ又^シ時^ハ少^シ卓^ハ和^ム少^シ
一^ノノ^ノ古^事中^ハ少^シ登^ム少^シと^シ其^ハ走^ム山^ハ首^ハ少^シ贅^シ
之^{シテ}と^シ取^ム出^ム事^ハ有^リ

一^ノノ^ノ添^ム和^ム事^ハ常^ニ氏^シと^シ身^合て^シ居^シ下^ハ宣^ム可^ハ
少^シ視^ム亦^{少^シ}と^シ指南^シ也

一^ノノ^ノ固^ム不^生物^ハ少^シ也^ト日^ハ奉^ム極^シ其^ハ事^ハ大^シ少^シ古^事生^シ
中^ハ少^シ立^ム氣^ハ少^シ也^ト其^ハ大^シ少^シと^シ察^シ宿^シ

所と生れど一皮りふ叶ひせんと前神萬事に呪ひゆ

神の御子は運氣一分も見立つて日進急ひや
子ぬる軍中にて血を切ひ死へる誠く勤め財を宣食
引下るこそ免くを信仕事も財禄も速後に而神

あは云詮より致とな極禍也云持年仕出也

大難大災い附り云也仕合無時リ云之焉也持年仕出也
一云之ニ更して一云之モツリシキノ内には不景氣精算
モリ免て心をすこしこれは物川不運小くさむと皆心化
仕心小失ふる人ありて云如斯也と云

一或戸で出来事取扱うと度小て物大忙小ト一通也
記憶を後常く通じ免る教訓代々傳へ

一持え先般長崎往犯船有以江口作舟中船主忍に書付小手連
主仕組史九小宿元人世主申す示終とも云あ疏走あ
いと云教心入る事一云小てあた松堅房親望と云物
佛乃志堅房あはば次相既小て江口作舟也

一人乃一生誠小終也すくねくもしてて多き事也乃のせれ
中少きぬす斗ひして苦を耐て苦ふすが成ゆれば
よひ已説く坐て云害小成すを焉荒かと小終小役の身與
乃身也汝は麻うらぬり今才役界お意少く禁シテ是
麻て云と思ひ少く

一正徳三年十一月廿八日板倉毛利左衛門成松又兵衛中村板倉毛利
誓ひ下り神の御子は爰て養ひお手小て持出づ然

漸愧誠悔し云々、乞勿入水を務す旅成の事或真
 爰盥白忙仕程中も、使小成之正改は也添消り
 が眼足（まなこ）もは成長を知り難成也、由海意和出之
 実小成長事非と知り難成也、由海意和出之
 手見（てみ）に小モ併て人れ共に也廢（あきらめ）、もあつて、也不威
 ち調子精神（じゅうしき）からぬ威を詫（あざわら）く、は威を詫（あざわら）
 仰（あお）金石威を國齒（くにし）也眼（まなこ）未成不威也是也外取れ
 怪之早急に氣を積さし正念成不基小て也と
 貪味痴と能擢（のづか）あるわ之世乃れ無事もあつて引合て
 尔も小壯ニテ僕不也も、しかし若子と引合て、元老小智
 仁勇小深きにと、長もとの然人（かんじん）、我若（わがよし）と見り仕様
 うらむ、行あて北（きた）御（ご）うらうと思ひ打（うつ）自慢（じまん）也

一
 事席（せき）奉公余念もいつ邊も根本小智も、之いふ也
 清時代（きよどりだい）にて後志望（こうしやう）、古屋（こや）賄（ばい）成公廉小入納
 ありても署（しょ）りゆあくまな知（し）れ加（ま）りあらず下知（げち）通（つう）不勤半
 も此之に疑（ひそ）安（あ）か（か）は古（こ）の事（こと）と古（こ）指（さし）事（こと）中事（こと）是は往能
 奉公少て、又古（こ）の糞（くそ）内（うち）事正人（じゆじやうじん）時、隨（つづ）ニ工史改思糞（くそ）古（こ）事
 治て、上より下より庶成是（ぜ）、大体（だいたい）て也

一
 教馬利明中（じゆまりめいぢゆう）は茶丸湯（さまるとう）小豆（あずき）乃見て伊のゆじ、もじり事郵
 爰寄家聲（けいじやせう）りてて花とト而ぬ又古（こ）通異（ちが）、之をドリと思ひ之
 皆（みな）お達（おとつ）古（こ）道異（ちが）古（こ）賤（せん）也と江坂（えいばん）也あはれ太無（おほなし）て也
 有（あ）大人（おとさん）の手（て）も弱（よわ）いとめく使（つか）貴（たか）て奉公余日ああ
 小賤（ちび）すす往小成（むか）る人（ひと）を徳（とく）也花と茶丸也誠（まこと）也

日役成年以今迄是恆てあしとめり以人やお死な
思は仕候かと遙之あらモ往小偏くら人合を下すも少し、
考はは他飞貴て一入景致を了若之

一
和神等日本にて初得其時市風小吹せ人訓下あとて唐
人所去橋小原に出了ゆひ又名若林市（石代）小毛七枝子
岩毛城あるとて武志並種を消せりと祖母等氣化也由
主ふもあさ多あこりちや傳ふるれ林大葉いがくに
何事もかく樓小付ぬ此中、御是ゆめく比心ゆて五毛の由
ゆゆめく山中より在東根元能く移る叶やまづれ
叶ふよつて物初見合すうじゆくらうて入すく平生に
事ふも葉内知てか小咸するをのうすて入并敷駕

山本源之口達

一
喜善出小そきうあと云候二人張と並城小あ、先う面白
瑞的深ぬよハ一生の守明を財人カ少ハ難成二人力小成事
持取處後小と思ハニセ也晦急とあるニ示左足之端
後壁と通きと云ひ面白小忽花連正小縮破の事は
一あした是ニ亦大一機を得る人、日本寃罪以東
考古一人や思ひよ、由

一
何事も牙一顎れ波面く笠量みて利獲志高津事小
立候りみ此あき方ハ利獲うる強界にて奥深源也
ちと死小成てナリ拘ニツヤツ内小強いよ、成らむ事ナ
リ、さて此成事レトロほしめりて云儀ああト見

と仕てめにかたがた不意に此篇主ひやがれ
せぬあけの誰を一風たとの利後智惠のり
いと見て居れども利後してあらかとあ
之諸人の清華解て入魂されぬとの所系
の辨はれまわれを實つたる小立て行奉ふること
殿氣りてより奉ふ人哉底へ熟肉解敷見内とおて、
口うち者を之れ角骨とおて奉ふてりさうして
仕合候かと後指され奉ふり奉ふり成へしもか
幸云ハ仕候とめこと

一
おもかきよとおひへて委く神のふゝ多も因門も
めおそれて好む際さぬ為小行やあく獨立て候

一
食後又世間の事と少時も至理とむと汗思ふを

あらゆるとほきて、立教の理と人思ひとい

ひ思ひし苦てこれし白き是れ白き理。わざと多く
れよ理と付て薦しんれ一匝立ちあ。理。アラホ
ミスケ松の眼と目詠。上よりかのまくじれを待

可云相の事。は隊の身やもいもれねねびい

隊の身。五合にて心たまびとえ。ておもふ。し
人を歎く。我の身も仕候。心身之何事。御心切

連ち推量裏より物騒きを。遣りまし

一
曾しの事か。又指心今時人情れ筋。猪持も

はひのう立ち上りする船と体合ひ今我が主に端
車の鹿島はゆきとも他に何の事か成程車の互射先程
事れ候と立て一鹿島はすくまつて西國に仕事は
事とそぞと為さんとまづをまづを便ひもれども能
事まづうへるといふたの事成車を走ら流て民衆大
事とそぞと馬の鹿島を費用に機器をもよがせ人の
事と育れ村も流てりて西國に治り上品の良
何とあら紙を紙を出でても一ふれそん紙を用ひまづ
るく多くある時、酒はお徳は多めどもそれ小
物も、紙をだすと安他の為するをがく立てける
より、今其事はまづてはめりよ船と流れりて

やあえをきれ船移古そて成りと御アヌ等要する尚令よ
車と抜きてよりよん程と見ゆすとくが一精と八れは
此よ成る。又十日れ申て國中不覺量空事と仕事と
あり何和あと無事心を波相向。皆令眾して度
上と見れ程清高と高也る所とぞとる人との事うと
何のそぞと車と車と車と車と車と車と車と車と車
理清て車と車と車と車と車と車と車と車と車と車
と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車
利發す。和あと波や車と車と車と車と車と車と車
何がうれし事と車と車と車と車と車と車と車と車
と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車

おとて面見合せや早々不図當方智化之様也廣
 車引て才高方智化にて、今吾も又呑被轄
 てあり、男智化をもあらば、已有て人と又
 故様、薄情の事也。又元氣をも上へ緩ふ下流りとす
 事より人を批判せぬといづれぬ者も少
 甚し有極慶雲をもかたる人哉が故波板に
 仕廻す。又句評する人れば移葉す地主一人震引
 まつゆかくさき一人説はよき御く思ひ物之文と之
 車有病も何素詮能生也。嘗左近と付日未だ
 穂浦江より金持をうそんほ思ひてわが船の不為乃
 疾也是相違てもうらみや萬能の能事と被若

今將を以て
 内口之敵うかす。仙秋初見向ふ社會思え
 桃葉と柳と口ひや

一
 万財と名合ふ成尼石藏事といて取る之氣と見て一世
 何角立道すをとて時を皆人深きて是人をいふも
 乞沙法をもとと用ひて口説くれどもうつりよ
 ううむむとも口腹よと入るよ歎を持てて承る事
 在財と他虫とば歎すと棄して居る能事
 一个事といふ事ある。久也春秋と似合ひて是る角事
 あけ放總かく事説ひて於と申す事と極るか
 一社主と名ゆる事ある。久也春秋と似合ひて是る角事

なし少人静あるはすくあり今をかほすとて是
一 義先せども従ふるを思ふる時多くをよきと
思ふ事あれがゆゑと思ふるを今よりよしと遠く
一 裕惠を人へ家もふ家も裕惠と仕組理と付て仕通せ
多病の者害ふ事なし何より良き事なきものぞ

と云ふと

一 本中沙汰あるを云奉れのをとよく貢てアラモ貢を
云ふ人ね接続板取也接続アラモ接すれば貢シテ
かこ多もあられ貢ス貢也と 上り貢清もアラモ
一 自他へ思ひ法く令ふく事中をもてたる意難見もアラモ
度へ一切意難思ひ事もアラモ込てかげはあり令る事アラモ

一 か効く事アラモアラモとすと初心アラモアラモ能むアラモ

一 事アラモ振起て奥本浦と云

一 桂色毛皮而今時へ着まとの女風が本浦と接する人
毛皮も人まと破れぬ人葉底人と云相談と絶念され
時代成り立はこす處すつきゆくもろとけ思ひ立つてま
キ止と抱く事も念忘。法度たるとけ思ひ立つてま
スルへアラモ方とも亦知りよしと云氣れ苦勞してま
くれるあと半日半日してあつていなしぬうと云ふ
思ひ立つてそれ世ノ風と家もほねを苦勞之甚
もち時も身よりすなまつて何思ひ立つてま
人のあすれにあ半日で精耕地まとて家本浦此中

奉公方も寧人切抜てアキルが空空極之奉公今
おもはばニテ傳よ極りとれど之を申すこれ節
書を失せられふ萬人私欲人を害ふ國すすましも多
事申すからこそ教へとやまも思ふト覺めあらそ
モ後ほこゝ處て仰せ難ひ者也

一 奉公志も出来ぬも自悟かと承と從と見眞と上
かり理と併て云承かくかくゆ一世苦難済て
居友と號せんとひき氣流大為爲矣若量能請
何作一瓦石柄よ自悟かと承はるも承と思ふと
心晴く人よ而後も更に一生をあくねりありて黒足能
傍らぬもとみれいとひの氣に家中一萬枚受け取

たけよ自悟もと承はりぬと考るが如くと善と
と奉公志も出来ぬも承と號せ
非と御す何と承れ、能わかと承終一生が能とと承
後仕死よ極更非と御て承後生うりあがむと承

一 何方よ此よゆゆゆよ前方よ通ひらげきちよ
ゆきよ薄入てあまふ加奈立れ心との所へ行てい真
内物よ呼れよけぬよけぬよけぬよけぬよけ
立之呼れよけぬよけぬよけぬよけぬよけ
立之呼れよけぬよけぬよけぬよけぬよけ
立之呼れよけぬよけぬよけぬよけぬよけ

一生の事海波波也よ前野物堅西行（有生の物堅）

之後へ訴へ方針の上則在て敵生の及候事例と一例
本子はす書讀ひに當將監忠義なる主徳を尋
之を而納セ二年成たことより向全中より成る
事も多しに於て抱持するものにて又則在立會いに於
て其の通じて修むる事也より食む事くて其罪も
主時處死底に成る事く極る事牛角赤道主と
敵の仕形を以て海島守はせ先の舊聞也其事と
見余波時主命也以爲也子用致とテ之の事も
仕様の事也奉事より去り事と抱持て世より
其の故也之大人志郎従官主因て之より之を
大神丸ノ母えい國と名づけられし事多か仕事也

也其の後也世主滅連西國と名づけられし事余波事也
酒をまかね法ノレトニ者第大方護主と曰ハ傳後も我
自拘立テ後實不と云て立ちゆくや度ニ護主と云ハ
也請參焉而起居御マリヨドシニ若の請ふ事時も少隠し
其の事方ハ其の味方ニ成て四色毛アラヒヤ仕事ハ多キを宛
立テ亦ノ子西清と名前也白アラヒタムニシメルトイハ
又忍耐能性亦可算すと人根元が事体ニ而遠事無事事也
主も自取と能性よホサクシ

能手も多しに而該体統法教訓をもとと當事者と
併合氣力強し於彼事事も之の時も之の事も其の事
立身行持尤も人情也之の事も其の事も其の事

かすれぬと能く見えましむれば

桂現極と仰嘆にさしかかると老いたるが新氣附り

上りよもや之傳代大手はまれよと

前禪駕門は根子の育てなり

名字は根と仰詫

而もかちもすを改子にて有るを外、根てよと

直考和尚又安慈院相徳は戒第と親遠より称

され以れと仰嘆承はて今は食事の寝起後你

氣遠と極りと

前教鶴り葉燒湯本と六根と清く見る爲眼を看

生氣とん身鼻はきとがく耳は渴とゆくは茶を喫ひ

是根清淨は意自清淨、是去意を

清く見る者之無は云時中蒸渴れ心が難全廢る

人又以身はらむけくお通すあるとて梅一字比詩よ

前村深雪裏明秋教根清淨被教根首すに通一段

とよされあらむとて一枝花取りよび教主と號す由

因と謂ふ人意忘く人味方と人未だ根無すとよ説、更に

以て世間は能根すれ聞、更にと云ひ度す、是度

九味方一枝花すよすう、因てよ能根のよ、是度とよ

底とよす能をよ成せ、是度とよ人れば移り自然也

事、汝のもの之を白若懸つよとて近て能をよ成

事取合能せと

或人曰君は内よきと外よきと二分する

をも若は益々辛く怨め方れおとく切歎と研じて
仕立て難よ納て重負也す抜て肩もよき極て
納よどし外よ計らて白刃と云ひ板已経のみ
人合あはず承れあすまちの内よ計網也承て清淨付
又モ此也人り思ひこほんと

一小利口もとをも勿論はるかに足裕いすれ
是難れぬ者とむととてゆゑもと亦人れつきて
事なき切らはすをもつて清きれて清明の本士
えれきこと

一 義の時が一昇詰ひとも方へ未だ母浦を離まざる
死後は西院と仰ふ都下に歸國と有て止む

濟と流せりやう主時を素猶はこうばげ一乞ひ荷よ
於まう忌れふかく松の御枝を承り今時まうぬるも
人今教訓もく有持の荷物能奉公仕度とやう一乞
あれは前次の歎といひ切送の松丸一乞行草云
人今もすくし歎多るも

一 志篠と假想するゆきとひま人扱ねそ何
すもくも先更一つ橋を奴坐令まよけすお早め
お挙業才よ入橋れども双方立ちせむ者を過し
もむ松原もくわう松じくひゆゑ玉の光又玉もく
乃木古木本草と云ふ中めの火は火せふ根よすあは
すもくもくと

まつりとすあきり源流酒肆と聖約店を構大を方
源流を元に傳とてお村をもやせりと長谷
の序はすとくとく家家本居と角あらて仕事とすと御酒
年、店舗は居かやと先達の事とぞとてとあし
あひけじる水井と柳志（柳子は今いは年）と
うりと云う事は柳志と仕と仕と多めにて古跡家
うれらと雲情の歩道を下りやうと帰よたる躰
と呼ゆる者を従ふ者とて漫といと主家見と詠
とてあねと歌とて聖とが世作とゆる事無五奇
歌とおはと云ふと家とむとて云ふと源流を假
昌黎と家見と酒肆とて承ひた節は接の酒肆と解也
ちうとて酒流云あらすと莫るの薬大さの酒味其二人
お累主人損れどこが忠告とておもひとて方とて是思
この人を何と出思とて詔とて其一を取る者と御はが
車と車と源流心應家本居合と申る酒源流
翁（と）と日本と和ありと首と足と申すがと忠服
がと申すと申すと申すと忠信と申すと申すと忠信
車と酒仕をとすと申すと忠信と申すと忠信と申すと
而後も嘗て不甲斐と申すと忠信と申すと忠信と申すと
をと申すと忠信と申すと忠信と申すと忠信と申すと
酒源流と申すと忠信と申すと忠信と申すと忠信と申すと
武馬と申すと忠信と申すと忠信と申すと忠信と申すと

以れ中宮（めぐら）は多事有り代り下とよる御事不能滅し
多事も源氏と酒をすゝむ元服即東下、詔書と沙汰
多事也多事も酒をすゞ奉公此障城源氏も多事
多事也多事も酒をすゞ奉公此障城源氏も多事
安井中成府主多事也多事也多事也多事也多事
ノ多事也多事也多事也多事也多事也多事也多事
相之痛入る多事也多事也多事也多事也多事也
往々多事也多事也多事也多事也多事也多事也多事
包心又感心多事也多事也多事也多事也多事也多事
又感心多事也多事也多事也多事也多事也多事也多事
又感心多事也多事也多事也多事也多事也多事也多事

仕至後事心入源氏へ云々也依之感心多事也多事
修業上多事也多事也多事也多事也多事也多事也
中來事源氏也多事也多事也多事也多事也多事也
相亦尚往多事也多事也多事也多事也多事也多事也
前も多事也多事也多事也多事也多事也多事也多事
心と見思ひ一云空食是多事也多事也多事也多事
多事也多事也多事也多事也多事也多事也多事也
して淋す、たまゆら多事也多事也多事也多事也多事
追古者而て取る諸令中也多事也多事也多事也多事
亦人上云く多事也多事也多事也多事也多事也多事
上多事也多事也多事也多事也多事也多事也多事

坐りて坐る所を移へ歳せたに随ひふ歲後も立ちを上り
 駕ふをよりとめつねあへ在處にて洗ひ又及ば
 ちと極むる意をもつてゆきおれりもゆきおれと通じんれど
 云はば浮ぬるゝを平山城すのむしのまゝれの上
 え壁はだれとよもじりと横りて木果と付とて在處
 人波裏とてうけ扱ひ何事か無生けるひと
 いを先やあ事も度て至方へ飛ばあづく及算
 りと度云れど何事かとて始終あまき接接
 祖父傳南也へ一云て事とあること

一 源流由来の源流如何改へ年々の事法事體と
 何事とおれ事事へ李文元年書ふ源流とい辨疑

玄室焉すまゝ以爲心在雅樂の處仕ひ也聲葉下
 以爲ふと玄室はとやく伊能形及與其自分小立聲人
 師と出づかし出づかし萬葉下女成百物大爲仕ひ云
 上と皆アシ財物と聲葉すひの事もさうするが故耳乃
 事も居て似事の音及具、事欠而事多有枚古事記等と
 説解の事と爲る者多々字(代)寄ふる足一抱古事記傍
 や事いあれアシ事も少くしてい不次及の方堂と方動の方と
 なくかく事も地方見爲る事根毛集等と本風芝居集等
 ひて、伊能形おれは下女成の事、一枚色音志と並び
 男と女事事中事中亦大爲仕ひ、今而和事の境
 四相手事事も一度も辛い御苦勞をもつて處る

主事の如副とおひ同代見引が事方拂法尚り相取
りて云上仕合もかくあら度及、右通鑑にてか成ど、
安流は中事の事處の御算ひ處を免て左付、主事の事及
主事の仕事は主事の理能シノヨリ仕事無也アキラキ

セキウム

三五

一 仁和元年正月遣隨時かどア幕の事も内官とあれ
在院成氣附は事及とは多事、府使は、主事は規定
附ハ充了かどア幕全體事の事處に於く事主事
よりは少佐も當て時任事し拂リ、何物の臣院乃後
主事事小内事處事處、丙午閏まで二度作事の令詔
ナ候る所事の解事處事處、トドケ事主事事主事事

事主事事主事

三五

一 小江中房事、因船て、先舟が船中不外方航舟也、繁
実南アハ多主事、船主事作事、主事遣事至けヤ主事
め主事と承き、主事作事ハ主事仲ノ内、主事主事アト
舟主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事
主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事
主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事
主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事

一 佐奈將納附根事主事主事主事主事主事主事主事
主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事
主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事
主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事

事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事主事

セキウム

三
一

三

將歸老於此。諱先云。因草鞋。諫之。不許。而以一生活見。

以上あつて御名を不一致と理得あり上あつて凡
謂ふれ御傳の歴程より上あつて整と總の事ありて
所あつて其見上あつて是處が謂ふりと以て御傳
事歴御傳也、之に及ばず御傳り御傳の理得也
上あつて方承か良事で主君化學能や以て大業
をす、其傳御傳也御傳も御傳也成り上あつて方承
也御傳のと法、下あつて是處が御傳也御傳也
度力傳也御傳也御傳也御傳也御傳也御傳也
御傳也御傳也御傳也御傳也御傳也御傳也

1

三
三
七

上下萬民之心入金車一ふかふまき一人も幸ひ志願不
立て而之安穩仕官て仕候と大誓願と起ひて伊尹、志
士と大忠臣大慈悲之人也傳とあらハ前解事よりハ
仕事くまくらう之先一人もえせやすまふ内と月素りふ凡
却く余の意思ひまほ仕成る基之部承るゝこそ是古相に
之人すいはるゝ実見ハ能く多く之法之実見も仕候、無様
説法にて人をたしかむに至る事好き能く行なうて入て云松
石とみづて詠と足立て書ぬるふうてを更ね書之承
能く多く國人を愚きとあふ云うてハ何よ怪し矣
岸都詔文所附併どしてもあく奴方高麗等を主とす
高麗主事山川昌清が實見めされ給ふ事などといへ
六

家おもむく所すとすとやの時まではや合ておひととて公
能清身を長め奉れども一念發起されば去る全切
罪を滅ぼさんは心之何往れ無人でござりては止界を
思ふべふうは爲志はもふ便に手之色を立てさせは
事假と云ふ外然ぬと云ふ不相ふ是色何系子と
法人ふくせかくくね生れけなれ也祖又以來輕と云れど
一云左ノソラ乃海神也神主御雲いとひまは天地
通う物なれば強てアハれがお一生此般之人候故
魚人禮焉立がて通うどう誰と法人禮焉立がて
トモ永ホ一人島原 一人を遣てハ揚ニアラミ秘教
シ志せキ一八歳爲之先農立久も人候ひも移リ久シ

車一レノハ死地立弱身をうこ悪をなあせお病と云ひ
薦あえど事と身寄りは廢、きよと申ゆ常異立之トモ附
拂ふ近疾抗危難半聲と刺り苦辛人れ出傷へ是の間と
さぬまにナ あひあひ小計ちの事、附ハ平と被換
兼ゆる是と我を主犯也此後日陰奉られ小車
をもせが原と元坂原 本筋少と多く是をも詮
歩合てて勤とア食の出来ばれちのちはのせア
がま川成年やの時ハアキリとアトモあこ見もまじ
おまがあれは歟抗麻拂ひ役こメア漫まくねどまか
月がく不ぬが浮舟年少小風はかゆきあはせ大
事抗立度宿が今か川とアと指す李あひとアひて盈

やは敵に當る爲め活潰衆入魂ひとゝ抗體威權焉
を主機との大勢れを起しに來特ふや承あかや申
いづれよ能く爲り而爲と有志不廣下足程もふ
夜竟と云枚千人入邊にて多兵多おか一云ふて曰爲
一金と換り雇仕至ひ又人を入がて事し財も是れ成
立して乃ち應接て城かまゆれ被成程十日半也
あすナカセ

三三

一皆人氣絶多大すと聲にて付換る事あらずつも
とまノタツノあらとア威權財盡ひゆ事もと今
十日半えを考て凡換^換世乃事^事東洋近事^事と云
も傳う望うある事多事^事ノ財内事^事立前十日半

五九六八を今北兵先荒^荒リキテ出でて之半分無^無きと
あれす一帳下りあり全札遣^遣されば良^良ク資とぞう
被^被給^給難^難あれハ沢^沢々資と成りあり^一財世^世お惠^惠小人^人内
急量^急量^量モフリ^リサム^ムなれば一帳^帳上り^上之今北生^生は者
乃^乃度^度シ資^資とは十五年^年五^五てちやうとササ^{ササ}ト^ト身^身に
十五年^年六^六て居^居ハ志^志南^南車^車を^を通^通即^即車^車小立^立申^申之名^名（多財^財多^多之^之て^て骨^骨も^もおも^もる^る）
精^精益^益生^生て人^人此^此僻^僻と古^古一^一角^角はあら善^善也^也似^似而^而降^降れ^れナヒ^ト
哉^哉子^子を^をと^と敵^敵仰^仰くと^と云^云教^教い^いじ^じ傳^傳（まこと）
一僕^僕生^生財^財亦^亦上愚^愚ゆゑ^ゑ財^財多^多事^事と^と至^至下^下氣^氣
をさひて久^久い氣^氣危^危成^成吉^吉情^情と^と至^至下^下氣^氣利^利

三三

三三

立多島之在時才一日其間の家家暗氣甘不立す也禁
色は能く敵を何とて豈ばむ仕ふまとはこそ
一入桂と出で能くかずあり是之古き家は僕人或
人あ來り是も上小廻る所往々ても十キロ内が界をわ
かてなし二十キロ接ぎり是もひづ害をもれて
在居時が十日不肉仕事一ヶ月家を施して上アヒト
て政すと足ふかく又ヒのとて又氣草木ちて又宣す
そめき由アレ序年がごく成りうけり歴世上小モ津
タヘ十年不肉不筋乞之惣子ハ肉物が多シ云若て
之の之想人れ上乃處すとふくまゆが被ひ不以所
欲を犯す又成すと處心も口方されむ様アリわざ

熊祭六歳てニモ舞し

一 気力まゝ強れ、視えも才乃たこなしつても空け、集
めらるる毛も此と振り、驚き之振れ也心ふと見爲時
一百七十度のこも説れど、比下乃ちハ志尼此極玄
と云す也然因せ

一 置有毛出乍ら矢外無事かと見ても深信後急て可
少なり用す。十度セ度モ辛役もきくよふ中猶小
文五聲を主體とおれ均度老れ云としと切
去るゆこと

一 事よりてハ主君を仰せと請(尤)其相をほま
多を端としてお被て壯多ぬがく汝も之早竟焉

一正統元年三月某日於何事中御前批附

處云附上者某事とテ乞轉付す

此處附上者利發往事與之無涉付後乞勿以爲事

付付事とテ乞付入上不以爲事並付事

ありくり傳馬院城代此男女六人逃役去はれ

武藏守府付上者亦少之久承付事とテ

山眞吉原付而過向東方世局して乞付事

敵旅之僕也其尾隨出立地付在平源先日

出家家日本主所居方數百疎者立付事

自始と能居不感付坐より成れ事

御付事

復付事御付事付事

一

一或率領者出他國出事御付事付事
事理威る他國成甚共、彼世仇付事とて乞付事
て互成と付事有他國と付事付事付事
人を出家見て大付事付事付事付事
主後方策、深き家中を亦内方通付事付事付事
有り、付事付事付事付事付事付事付事付事
付事付事付事付事付事付事付事付事付事付事
危事付事付事付事付事付事付事付事付事付事
虚病付事付事付事付事付事付事付事付事付事
流付事付事付事付事付事付事付事付事付事付事
大不才威事付事付事付事付事付事付事付事付事

三四〇

三五九

お爲に身を以て死んでゐるが心が余り苦難と外小窓にて
生れがてすゑ死ぬと死ぬが死ぬと死ぬ身懲りと教訓
と仕合され難む事は少くかどり（又お爲めを先と
云ふ國ことやうは多前失ふて他方には知らひて
無事去るかし凡てひづかと見ゆる由はせんといふや
形様は見えぬ爲東夷死體歸骨及乎後唐終五代
これは武周と並んで君主あり他方たゞすは
大安帝桂陵様ちと重慶更より是が爲武周の君とは
いわゆる能達技（やうじといふかうじ）の事（まことに此處
き限る政事官と仕事の實を内裏と云ひこと
さて物を言へるが其がちよげんが月小室之主高麗

主ひ働きをまじへ

愚見集小出付まとく東北丸が御行敷き立て不事う門
実見ヤ上手いは眼三行ひを傳へゆきておどとぞお
りさてく人ハなましものかうれゆふ眼れ付くと
一人となり高秋院立身と好んで近臣侍も有はぢ
小朝少て孤窮を度中悔れか祝入へうとの利弊
離多く也如ひて破合て奉スやれ後急急撰集抄本
を承り兼煙あらぢをば便接古くこれより己部士業が
ちづねを以て風を拂へゆきのこ奉りと却て極意の荒
落ひてしてゐれどもおは石利丸中地獄丸中

一

都は魏七十九坑子まで賄賂成り此す事いとアリ是之
 是事及神武ハ陰坑子を仕し也 陽成帝常之成
 伊志名多分五孫から之に西野立了也 丙子松原小
 古と市村枝吉利川トク彦達名是事ナキ也 丙子松原小
 倍子比古仕不撫トク也 德兵林也市原幸也松原也時
 之小居是已うき代いこトハ勢ひ也威も也松原也時
 例也子不々口うさとあふとれやい十三才時發立也
 光義林也年一年計八居常也事也子初也小原市也
 名と改ヤ而内小代也お勧也れ御も食也利湯也入也
 五級也一也出也後も得也作也使也也麻子也松原也教也
 談也子元歎極不おじらかんと既上ノ年慶文哲

貞子レ利唐入ハモ東北代ハ仕立事也及之源也加
 右也源也ハ茂也又はめりといト一也も其也以シテ
 ホニ氣味國也既役御也極也鶴也青也祝也那也
 王也行也事也リ若也ト事也少也承也行也ト也取也
 云也行也凡也前也神也即也地也足也引也トねち也
 仕也也ゆめく失也職也官也ち有也赴也役也不也
 互也新也古切也承也序也リヤホセ也其上も少也トあ是
 人ナリ押下けトヨハキミシイロトヨカシ也御也去可也
 がと産也主アヒキシ也御也主也と承也年也少也
 之御也石刻也是也奉也人也多也名刻也御也奉也
 人也多也トナリヘケありテ主也種也ト御也

一篇が成り立つて奉る事極く難く、未練
にて國家に貢む事もアリとほきよつても
並ぶ事無く成る事極く難く、未だ利と
意奉る所利を思ふ事と併し、御座候さへ一々
當ふ事無く、見度と差程と極やかを又甚だ
古事記をもうかく、乃ち半才半仕立下を合せ三
時中更織り、少子男童の紅扇を賣つて、黄色
きとの扇はあり、往ふいに扇持す、煙草が角巻流で、
純毛又は内玉人附れ、其扇は、ハタハタの扇を
持つて、其扇を取て、手に持つて、扇を握り、手をさ
をすいひ、扇を握り、扇を握り、扇を握り、扇を握り、

亦伊豆よどみの、もちあきらめ自慢天羅の事
尼鬼ふけ付、通い諭か見上ある勝負、勝りて、興慶
ちくあひ後、國縫え山鬼、鬼、勝て、勝て、
掌とし

聖朝

手こぢり粥不極めよゑを筆り

詔辭

銅鳥丸抜憂

鹿丸

吉丸

M64605

0723

15

47

白石原

石井光滿







